

にし くに よし
市原市西国吉遺跡

1999

株式会社 協 和 エ ク シ オ
財団法人 市原市文化財センター

序 文

房総半島の中央に位置する市原市には、上総国分寺に代表される著名な遺跡が数多く所在し、「王賜」銘が象嵌されていることで一躍有名となりました稲荷台1号墳の鉄剣など貴重な遺物も出土しております。

市原市における埋蔵文化財の発掘調査数は、1970年代以降高度経済成長に相応して急激に増加し、その結果多くの成果をあげてまいりました。しかし、このことは大規模造成などによる土地の改変が進み、多くの遺跡が失われていったことと表裏を成すものであります。地域の開発と埋蔵文化財の保護、さらには自然環境の保全などの諸問題といかに調和を図っていくか、我々に課せられた課題は決して少なくありません。

今回ここに報告する西国吉遺跡は、第1種電気通信施設の設置に伴い関係諸機関の御協力をいただいて発掘調査を実施したものです。

調査の結果、弥生時代後期から古墳時代前期の竪穴住居跡や方形周溝墓などが検出されたほか、この地域に弥生文化がはじまったころに使われていた須和田式土器が出土するなど貴重な資料を得ることができました。

この報告書が学術資料としてはもとより、埋蔵文化財の保護と理解のために広く市民の皆様にも活用していただけるならば幸いです。

最後に、発掘調査並びに本書の刊行にあたり、御指導・御協力をいただきました株式会社協和エクスシオ、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会ふるさと文化課をはじめとする関係諸機関に対し、心から感謝の意を表します。

平成11年3月31日

財団法人 市原市文化財センター
理事長 小 茶 文 夫

例 言

1. 本書は、市原市西国吉 293に所在する西国吉遺跡（遺跡コード セ259）の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 発掘調査から報告書刊行に至る業務は、株式会社協和エクシオの委託を受け、財団法人市原市文化財センターが実施した。
3. 発掘調査の担当者及び実施期間は、下記のとおりである。

確認調査	担当者	高橋康男	調査期間	平成9年11月18日～平成9年12月3日
			対象面積	300㎡のうちの30㎡（対象面積の10%）
本調査	担当者	高橋康男	調査期間	平成9年12月4日～平成9年12月11日
			対象面積	300㎡
4. 本書の編集及び執筆は、蜂屋孝之が行い、遺物の実測を小川浩一が担当した。
5. 出土遺物及び調査記録は、すべて市原市埋蔵文化財調査センターで収蔵・保管している。
6. 発掘調査から報告書の刊行に至るまで、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会ふるさと文化課、株式会社協和エクシオの関係機関から御指導、御協力をいただいた。
7. 整理作業にあたり、田中清美、小出紳夫、大村直、木對和紀、渡辺修一の各氏から貴重な助言をいただきました。記してお礼申し上げます。

凡 例

1. 遺物実測図の縮尺は、弥生土器・土師器は $\frac{1}{4}$ 、拓影図は $\frac{1}{3}$ 、石器 $\frac{1}{3}$ 又は $\frac{2}{3}$ である。
2. 本書で使用了図面の方位は、すべて座標北である。
3. 本書で使用了地形図は下記のとおりである。

国土地理院発行	1/25,000地形図「鶴舞」	(NI-54-19-16-2)
国土地理院発行	1/25,000地形図「上総横田」	(NI-54-19-16-4)
4. 遺構実測図中の炉跡、土器の赤彩、石器の研磨痕・敲打痕は下図のようなスクリーントーンを使用している。

〔遺 構〕

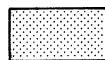
〔遺 物〕



炉跡



赤彩



研磨痕



敲打痕

本文目次

第1章	はじめに	1
第1節	調査にいたる経緯	1
第2節	遺跡の位置と環境	1
第3節	調査の方法	3
第2章	調査の成果	4
第1節	概要	4
第2節	遺構と遺物	6
第3節	遺構外出土縄文土器	16
第4節	遺構外出土弥生土器	16
第5節	遺構外出土石器	21
第3章	まとめ	22
	抄録	

挿図目次

第1図	西国吉遺跡の位置と周辺遺跡	1	第8図	出土遺物(3)	11
第2図	西国吉遺跡周辺の地形	2	第9図	遺構外出土縄文土器	16
第3図	グリッド分割図	3	第10図	遺構外出土弥生土器(1)	17
第4図	土層断面図	4	第11図	遺構外出土弥生土器(2)	18
第5図	検出遺構及び遺物分布図	5	第12図	遺構外出土弥生土器(3)	19
第6図	出土遺物(1)	9	第13図	遺構外出土石器	21
第7図	出土遺物(2)	10			

表目次

第1表	出土土器観察表	12	第3表	出土土器観察表	14
第2表	出土土器観察表	13	第4表	出土土器観察表	15

図版目次

図版1	西国吉遺跡周辺の航空写真	図版4	出土遺物(1)
図版2	調査区近景、001・004・011号跡、 001号跡土層断面、002号跡、003号跡、 003号跡遺物出土状況	図版5	出土遺物(2)
図版3	001・004号跡、005号跡、006号跡、 006号跡土層断面、006・007・009号跡、 007号跡遺物出土状況、008号跡	図版6	出土遺物(3)
		図版7	出土遺物(4)

第1章 はじめに

第1節 調査の概要

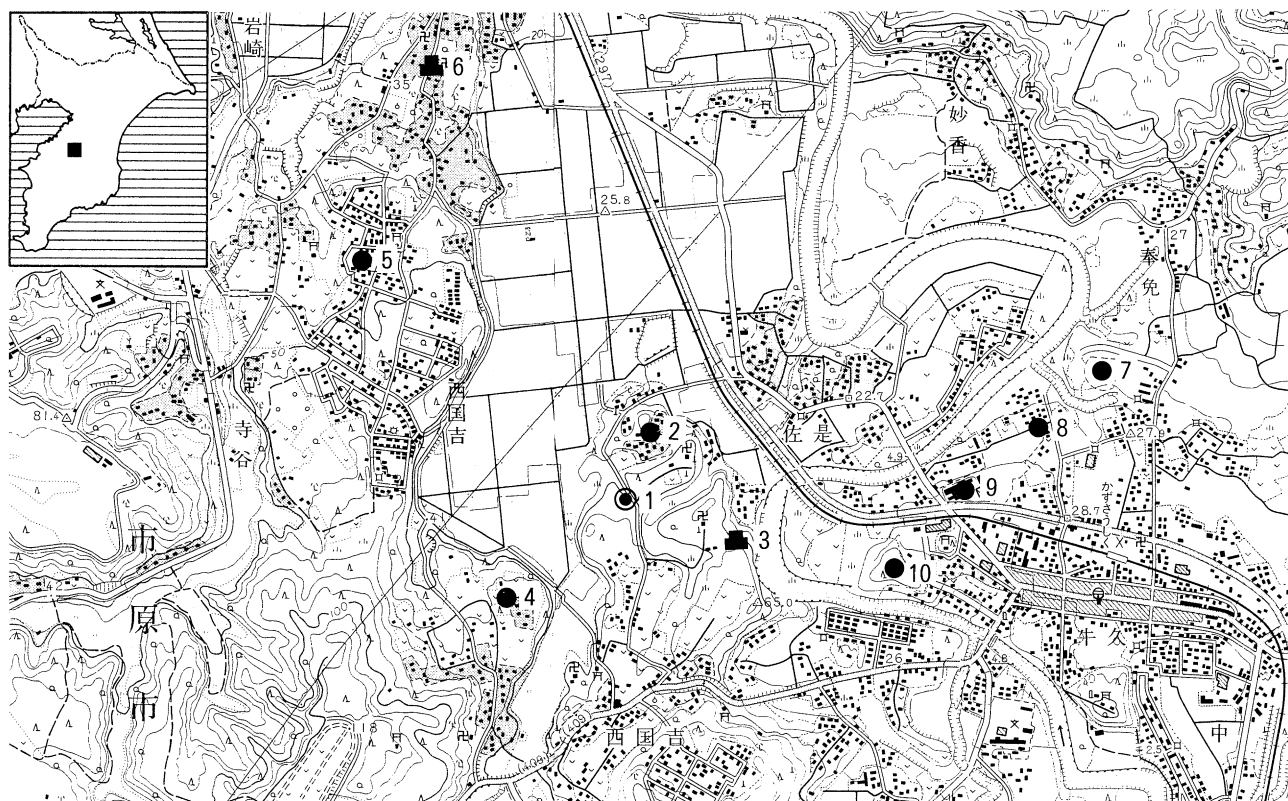
1. 調査にいたる経緯

今回の発掘調査は、株式会社協和エクシオによる無線基地局の設置に先行して実施されたものである。建設工事の着工に先がけ、株式会社協和エクシオから地区内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会が、千葉県教育委員会教育長および市原市教育委員会教育長宛提出された。これを受けて、千葉県教育庁文化課、市原市教育委員会ふるさと文化課との三者により慎重に協議を重ねた結果、遺構の有無を確認するための確認調査を実施することとなった。

確認調査は、財団法人市原市文化財センターが実施することとなり、平成9年11月4日に財団法人市原市文化財センターとの間に委託契約が締結され、平成9年11月18日～平成9年12月3日まで確認調査が実施された。確認調査の結果、本調査の必要が生じたため、平成9年12月4日～平成9年12月11日まで本調査が実施された。整理作業は、平成10年度に実施し、報告書刊行の運びとなった。

第2節 遺跡の位置と環境

市原市は、房総半島のほぼ中央に位置し、北は東京湾に注ぐ村田川を境として千葉市と接し、東は茂原市、長生郡長柄町、長南町、夷隅郡大多喜町、西は袖ヶ浦市、君津市、木更津市などに接してい



1. 西国吉遺跡
2. 佐是古墳群
3. 佐是城
4. 西国吉関ノ台遺跡
5. 南岩崎遺跡群(吉野古墳群)
6. 西国吉砦跡
7. 沢遺跡
8. 白木遺跡
9. 牛久Ⅰ～Ⅲ号墳
10. 石茶坂遺跡(牛久石茶坂古墳群)

第1図 西国吉遺跡の位置及び周辺遺跡 (S = 1 / 25,000)

る。地形的には、北部の大半は洪積台地で占められ、村田川による沖積低地がみられる。南部は上総丘陵が連なり、市の中心部を流れる養老川による沖積低地が広く展開している。

西国吉遺跡は、千葉県市原市西国吉293に所在する。養老川中流域左岸に位置し、調査区周辺の標高は約50m前後に達している。東京湾岸から直線距離にして約15km、養老川の沖積地を除けば周辺には山稜を望む地である。遺跡の所在する台地の北側及び西側は養老川の沖積地となっており、東側は養老川から分岐する支谷によって南北に長い台地を形成している。台地は標高60m前後を最高地として北に向かって次第に標高を下げていく。

台地の基本土層は、表土（Ⅰ層）、縄文土器、弥生土器、土師器などの遺物を包含する漸移層（Ⅱ層）、それ以下は立川ローム層となり、当地域の一般的な層序を示している。ただ今回の調査範囲においては、漸移層（Ⅱ層）の厚さがあり調査前の平らな地形に対して、立川ローム層上面の地形は、西側への緩傾斜面となっており、その緩傾斜を覆うように黒色土が厚く堆積していた状況である。

今回調査された西国吉遺跡が所在する台地の調査は、以前に行われたことはなく、今回の調査が初めてである。昭和49年に樋口清之らが今回の調査地点の西側、沖積地を隔てた対岸の台地を発掘調査している⁴⁾。「西国吉遺跡」として報告されているが、現行では南岩崎遺跡群（第1図5）としている所である。この時の調査では弥生時代後期末の竪穴住居跡2棟、古墳時代前期の竪穴21棟、5基の古墳が調査されている。南岩崎遺跡群には吉野古墳群が含まれており、50基以上の古墳が確認されてい



第2図 西国吉遺跡周辺の地形

る。昭和62年に吉野1号墳の隣接地が調査されており、1号墳以外に、古墳時代前期の竪穴住居跡3棟、同前期の方形周溝墓1基が確認されている⁽²⁾。西国吉遺跡の周囲には古墳群が多く、佐是古墳群(第1図2)が調査地点から北側に分布しており、前方後円墳、方墳、円墳などが密集している。また、養老川を挟む北側の対岸には妙香古墳群、やはり南西側対岸には牛久石茶坂古墳群(第1図9・10)が位置している。隣接する支谷を挟んで東側には佐是城(第1図3)が位置している。佐是城の歴史については、「斥南武田氏系図」や『市原郡誌』に武田信長の孫佐瀬三郎武田国信が天文年間に築城した記載があるほかは実態は明らかでないが、保存状況は良好な中世城郭である⁽³⁾。昭和60年と平成3年に小規模な発掘調査⁽⁴⁾が行われている。昭和60年の調査では、縄文時代中期の土坑、弥生時代の竪穴住居跡、円墳などが検出されている。また、平成3年の調査では、弥生時代後期と古墳時代後期の竪穴住居跡が検出されており、これらの調査から弥生時代から古墳時代にかけての集落跡が展開し、古墳群も伴うと予想される。養老川に近い沖積地の調査では、沢遺跡(第1図7)が昭和59年に発掘されている⁽⁵⁾。古墳時代以降の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、溝などが検出されているが周辺の古墳群などの造営を支えるほどの集落跡は確認されていない。

第3節 調査の方法

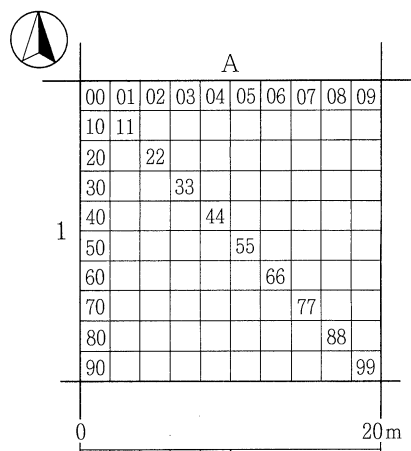
調査区の設定 調査対象範囲全域を公共座標に合わせて覆う20m×20mの方眼網を設定し、大グリッドとした。呼称は北西に起点をおき、北から南へ1, 2, 3…、西から東へA, B, C…の名称をつけた。それをさらに2m×2mの小グリッド100個に分割した。小グリッドは北西隅を起点に00~99の番号をふり、大小グリッドを組み合わせてたとえばA1-00のような呼称とした(第3図)。

確認調査 調査区の全対象面積の10%の確認グリッドを設定し、遺構・遺物の分布を確認した。

本調査 表土を重機によって除去したのち、遺構の精査を行った。

検出された竪穴住居跡については土層観察用のベルトを設定して調査を行った。遺物の取り上げは、必要に応じて個別に番号を付し、地点とレベルを記録した。また、土坑等についても基本的には同様の調査方法である。遺構外出土の遺物については、基本的に小グリッド一括で採取している。一部遺存状態の良い土器などは地点とレベルを記録している。

遺構番号 遺構の内容にかかわらず通し番号を使用し、3桁の番号を付した。番号は001号から始まる。本報告書中では調査時に付けられた番号をそのまま使用している。



第3図 グリッド分割図

註

- (1) 樋口清之ほか「千葉県西国吉遺跡の発掘調査」『考古学ジャーナル』96 1974年
- (2) 清藤一順「吉野1号墳・南岩崎吉野遺跡」『昭和62年度市原市埋蔵文化財緊急調査報告書』市原市教育委員会 1988年
- (3) 田所 真「佐是城跡」『千葉県所在中近世城館跡詳細分布調査報告書II』千葉県教育委員会 1996年
- (4) 柴田龍司「市原市佐是城跡」『千葉県中近世城跡研究調査報告書第6集』(財)千葉県文化財センター 1986年
田所 真「佐是城跡」『市原市文化財センター年報—平成2年度—』(財)市原市文化財センター 1994年
- (5) 米田耕之助『沢遺跡』(財)市原市文化財センター 1987年

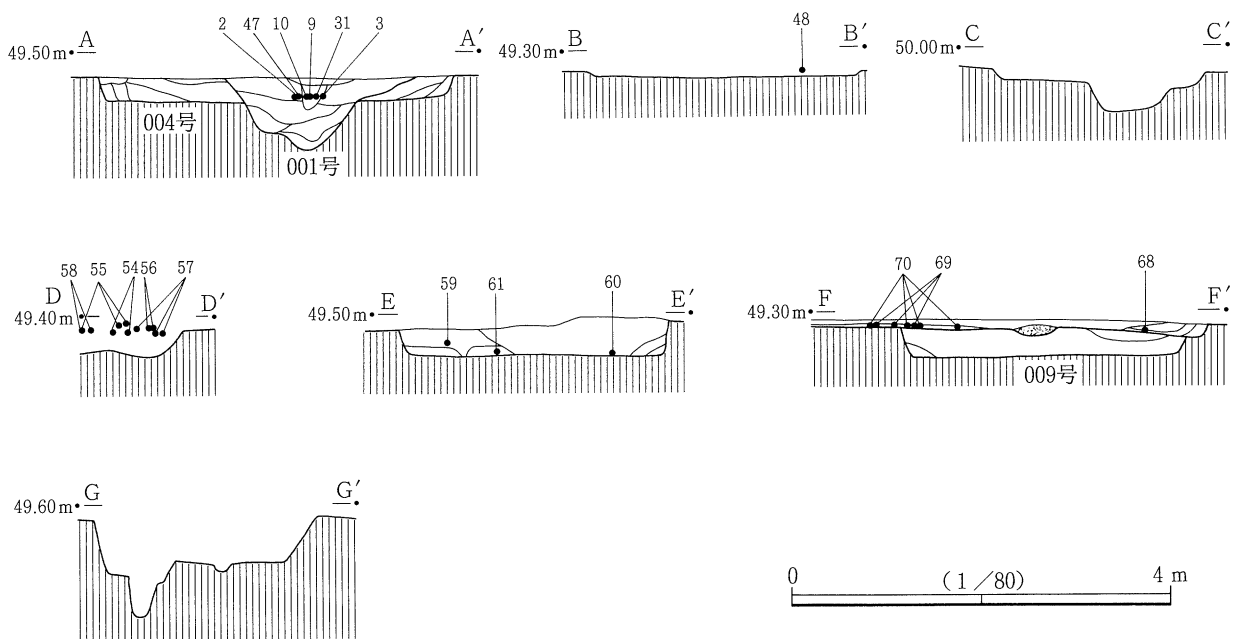
第2章 調査の成果

第1節 概要

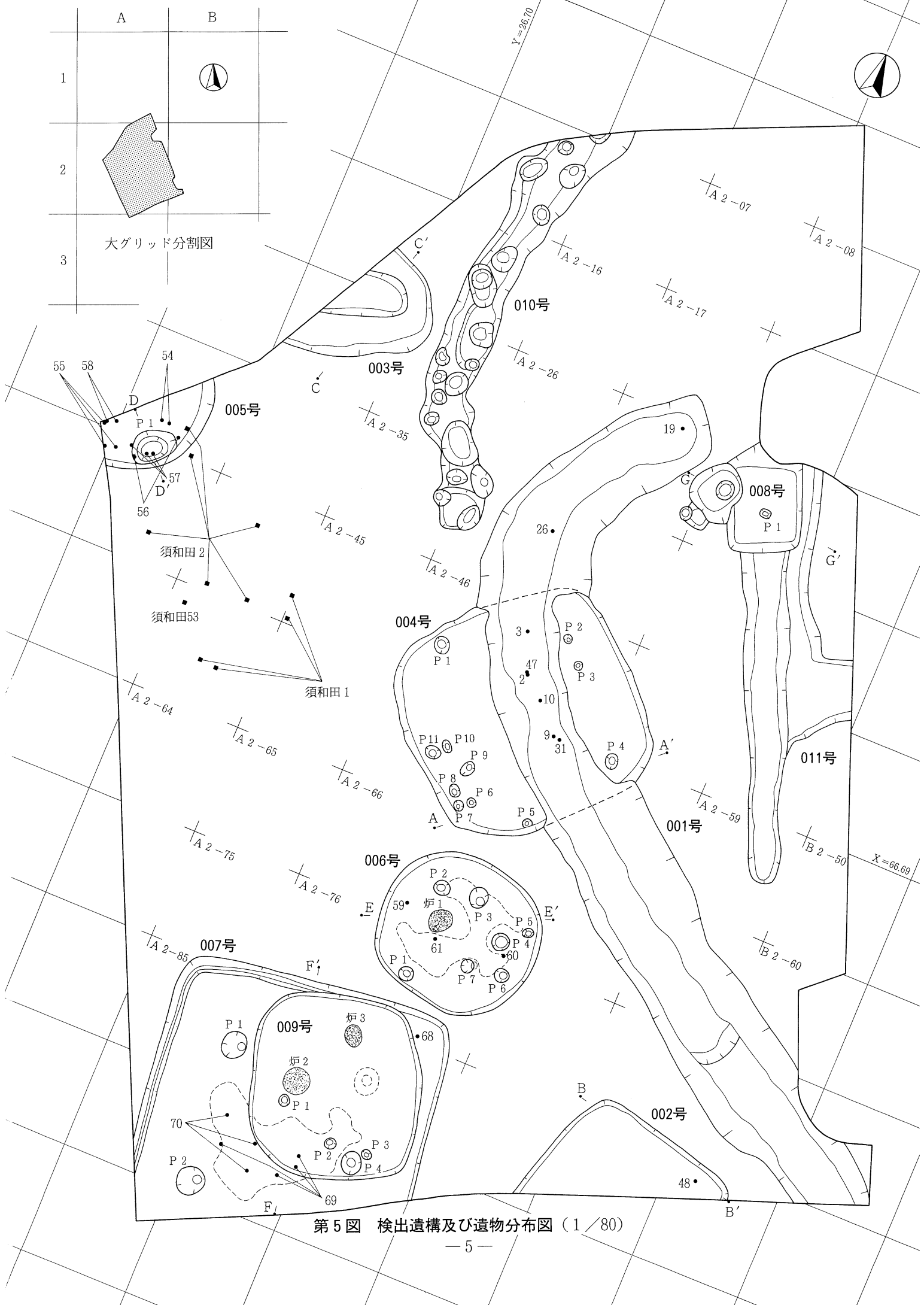
調査地点は、北に向かう緩い斜面に位置している。表土から遺構検出面までの深さが約1 mにも達していた。表土層から下、立川ローム上面（Ⅲ層）までの漸移層（Ⅱ層）は、黒褐色土が主体で全体に軟らかく、標高の高い南側から腐食土が漸移して厚く堆積したものと考えられる。遺構に伴わない弥生時代の遺物や古墳時代前期・後期の遺物が厚く堆積した黒褐色土中から出土しており、検出された弥生時代の竪穴が構築されて以降、黒褐色土の堆積量は比較的多かったと考えられる。

検出された遺構は、弥生時代後期の竪穴住居跡4棟、古墳時代前期の竪穴住居跡2棟、古墳時代前期の方形周溝墓1基、時期不明の溝状遺構2条、時期不明土坑2基である。調査面積が狭いにも関わらず検出された遺構の密度は高い。西国古遺跡が位置する台地は広大であり、台地の北部には古墳が密集し、佐是古墳群を形成している。円墳を主体に前方後円墳や方墳などが密集している。今回の調査によって、これらの古墳群にかかわる集団の集落跡がこの地においてある程度の規模をもって展開することが予想される。検出された遺構のほか、Ⅱ層中から縄文土器、弥生時代中期前半の土器・後期後半の土器、古墳時代後期の土器などが出土している。特に今回の調査で注目されるのは、遺構が検出されていないが須和田式土器がまとまってⅡ層中から出土したことである。

以下、各遺構・遺物について詳述していくが、遺構については数が少ないことから、第2節においてその性格にかかわらず遺構番号順で記述していくことにし、第3節～第5節では遺構外出土遺物について詳述することにしたい。なお、遺構外から出土した土師器については、第2節の出土土器観察表の中で説明するだけにしておくことにする。



第4図 土層断面図



第 5 図 検出遺構及び遺物分布図 (1/80)

第2節 遺構と遺物（第4～8図、図版2～6）

001号跡

A2-27からB2-70グリッドにかけて検出された。方形周溝墓と考えられる。調査前の状況は、墳丘と思われる高まりは認められなかった。発掘調査によっても土層断面に墳丘と考えられる盛土は確認されていない。本遺構の中心部は調査区外となっており、この部分には古くから道路が通っていたため、たとえば墳丘があったとしても以前から削平されていたと考えられる。周溝の北端は途切れており、全周していない。一辺約17m～18m程度の規模と推測される。周溝の幅は1.5～1.8m、最も深いところで検出面から0.65m、浅いところで0.35m程度である。周溝の深さは、南東に行くにしたがって深くなっていく。竪穴住居跡の004号跡と切り合っている。新旧関係はA-A'セクションから本遺構の方が新しいと判断される。埋葬施設は、検出されなかった。

周溝内からの出土遺物は、小型丸底埴、小型器台、高坏、小型鉢、手捏土器、炉器台、甕などである（第6図1～47）。時期は古墳前期を主体とするが、古墳前期でも若干時期の降るものも混在しているようである。このほか縄文土器、弥生中期・後期の土器などが出土している。001号跡と切り合う004号跡に関連するのではないかとと思われる弥生時代後期の土器が若干出土しており、004号跡の時期を考える上で一部を図示してみた（第6図40～47）。本遺構に関連する遺物のうち特徴的に出土しているのが、小型鉢14点と手捏土器10点である。手捏土器については、破片のため図示できないものがほかにも数点出土している。土器の出土分布は004号と切り合う付近で最も多いが、それ以外の場所からも散発に出土している。出土層位は、周溝底面からのものはなく、底面から30cm～45cm浮いた位置からのものが多かった。器種構成としては、同時期の竪穴住居跡から出土する器種構成とあまり変わらない内容である。炉器台などが方形周溝墓から出土するのは稀ではないと思われる。

002号跡

A2-89グリッドを主体に検出された竪穴住居跡である。南側約2分の1は調査区外となり、未調査である。平面の形態は方形を呈し、規模は一辺約3.1mと推定される。検出面からの竪穴の深さは、表土から検出面までの深さがあることから北壁7cm、西壁5cmと浅い。ピット等の施設は全く検出されなかった。検出された土器の時期からすれば、炉を伴う可能性が高いが調査区内からは検出されなかった。出土遺物は少なかったが、床面からハケメを伴う甕（第6図48）が出土しており、古墳前期の竪穴と判断される。

003号跡

A2-24グリッドを主体に検出された。検出面から2段に深くなる楕円形の土坑である。土坑の外径は、長径約3.0m、短径約2.0m、内径は長径約2.0m、短径0.8mである。検出面からの深さは最も深いところで0.40mである。底面は平らで凹凸はあまりない。出土遺物はなく、時期は不明だが、近世以前のものとして推測される。

004号跡

A2-57グリッドを主体に検出された隅丸方形の竪穴住居跡である。001号跡の周溝によって竪穴の中央が壊されている。新旧関係はA-A'セクションから本遺構の方が古いと判断される。規模は一

辺 4.1mである。竪穴の深さは北西壁36cm、南西壁30cm、南東壁19cm、北東壁23cmである。出土遺物から炉跡が伴う時期の竪穴と考えられるが、周溝によって壊され検出できなかった。ピットは全部で11検出された。P1が32cm、P2が14cm、P3が14cm、P4が24cm、P5が31cm、P6が13cm、P7が15cm、P8が23cm、P9が25cm、P10が17cm、P11が30cmである。どのピットも径が小さく浅いものが主である。遺物の出土量は001号跡の周溝によって竪穴の覆土が2分の1程度削土されていることから少なく、5点が図示できる程度であった。小型鉢、甕、壺などである。時期は、弥生時代後期末葉であろう（第7図49～53）。

005号跡

A2-44グリッドを主体に検出された竪穴住居跡である。西側約3分の2が調査区外となり、未調査である。平面の形態は円形と推測され、規模は直径約3.0m程度であろう。竪穴の深さは検出面から0.3mである。ピットが検出されている。深さは床面から10cmである。いわゆる貯蔵穴と思われる。出土遺物は、ピットの上面で集中して出土しており、弥生時代後期末葉の土器で占められている。鉢が4点、器台1点である（第7図54～58）。57・58は胎土・焼成が類似するが接合しないため別図にしたが、木更津市マミヤク遺跡127号・325号の各住居跡などからは鉢に脚が付く器台が出土しており、57・58が同一個体とすれば器台とすべきであろう。

006号跡

A2-67グリッドを主体に検出された竪穴住居跡である。平面の形態はほぼ円形を呈し、規模は直径2.9mである。炉1は中央からやや西側に寄っており、直径約0.4mの円形を呈する。炉内の焼土の堆積量はあまり多くはなかった。主軸方位はN-75°-Wである。竪穴の深さは検出面から0.1mである。床面には硬質部分が明瞭に残っていた（床面に点線で図示）。ピットは全部で7つ検出された。P1が31cm、P2が34cm、P3が29cm、P4が15cm、P5が11cm、P6が7cm、P7が47cmである。ピットの配置に規則性はなく、柱の構造は貧弱である。遺物の出土量は少なく、鉢、壺、台付甕程度で内容は豊富ではない（第7図59～63）。59は台付鉢の可能性も考えられる。出土土器の時期は、弥生時代後期と考えられる。

007号跡

A2-96グリッドを主体に検出された竪穴住居跡である。南側約4分の1が調査区外となり、未調査である。竪穴住居跡の009号跡と切り合っており、F-F'セクションが示す通り007号跡の方が新しいと判断される。平面の形態は方形を呈し、規模は一辺5.0mである。炉2は円形を呈し、直径0.5mを測る。主軸方位はN-6°-Wである。竪穴の深さは、検出面が表土からかなり深い地点であったため、壁はほとんど残存していない。支柱穴が2つ検出されたが、009号跡の位置にあるべき支柱穴は、009号の覆土が黒褐色を呈するため検出できなかった。P1が50cm、P2が56cmである。床面には硬質部分が明瞭に確認できた（床面に点線で図示）。遺物の出土量は比較的多かったが、竪穴の時期とは異なる遺物が、多く混入していた。器種は、高坏、甕などである（第7図64～第8図88）。68・69・70の甕は、床面から出土しており、これらの甕から007号跡は古墳時代前期の時期と考えられる。64・65の高坏は竪穴の検出面から出土している。時期的には古墳時代後期前葉と考えられ、主体的な土器

の時期とは異なる。007号跡の上層に何らかの遺構が存在した可能性もあろう。弥生時代後期末葉の土器が特徴的に出土しており、007号跡と切り合う009号跡に関連するのではないかとと思われるため若干図示してみた（第8図71～86）。敲石2点が竪穴内から出土している。87は片面のみ敲打痕を伴う。重量は271.6gで石材は、フォルンフェルスである。88は側縁のみ敲打痕を伴う。重量は324.5gで、石材はチャートである。竪穴に伴うかもしれない。

008号跡

A2-28グリッドを主体に検出された土坑である。011号と同時に調査したため土層断面で新旧関係を明らかにすることができなかったが、008号の方が新しいと思われる。形態は長方形を呈し、長辺1.8m、短辺1.3mである。検出面からの深さは47cmである。底面に深さ10cmのピットがある。西側に大きめのピットが検出されたが、本遺構よりもさらに新しい時期のものであろう。ピットの深さは検出面から1.08mである。本遺構からの出土遺物はなく、時期・性格は不明である。

009号跡

A2-86グリッドを主体に位置し、007号跡の床面下から検出された竪穴住居跡である。床面が深いため竪穴の検出状況は比較的良好であった。平面の形態は隅丸方形を呈し、規模は一辺3.2m、竪穴の深さは007号跡の床面から20cmである。炉跡は楕円形を呈し、長径0.4m、短径0.3mを測る。主軸方位はN-75°-Wである。ピットは全部で4つ検出された。P1が29cm、P2が32cm、P3が20cm、P4が19cmである。ピットの配置には規則性がないようである。床面には硬質部分が明瞭に確認できた（床面に点線で図示）。

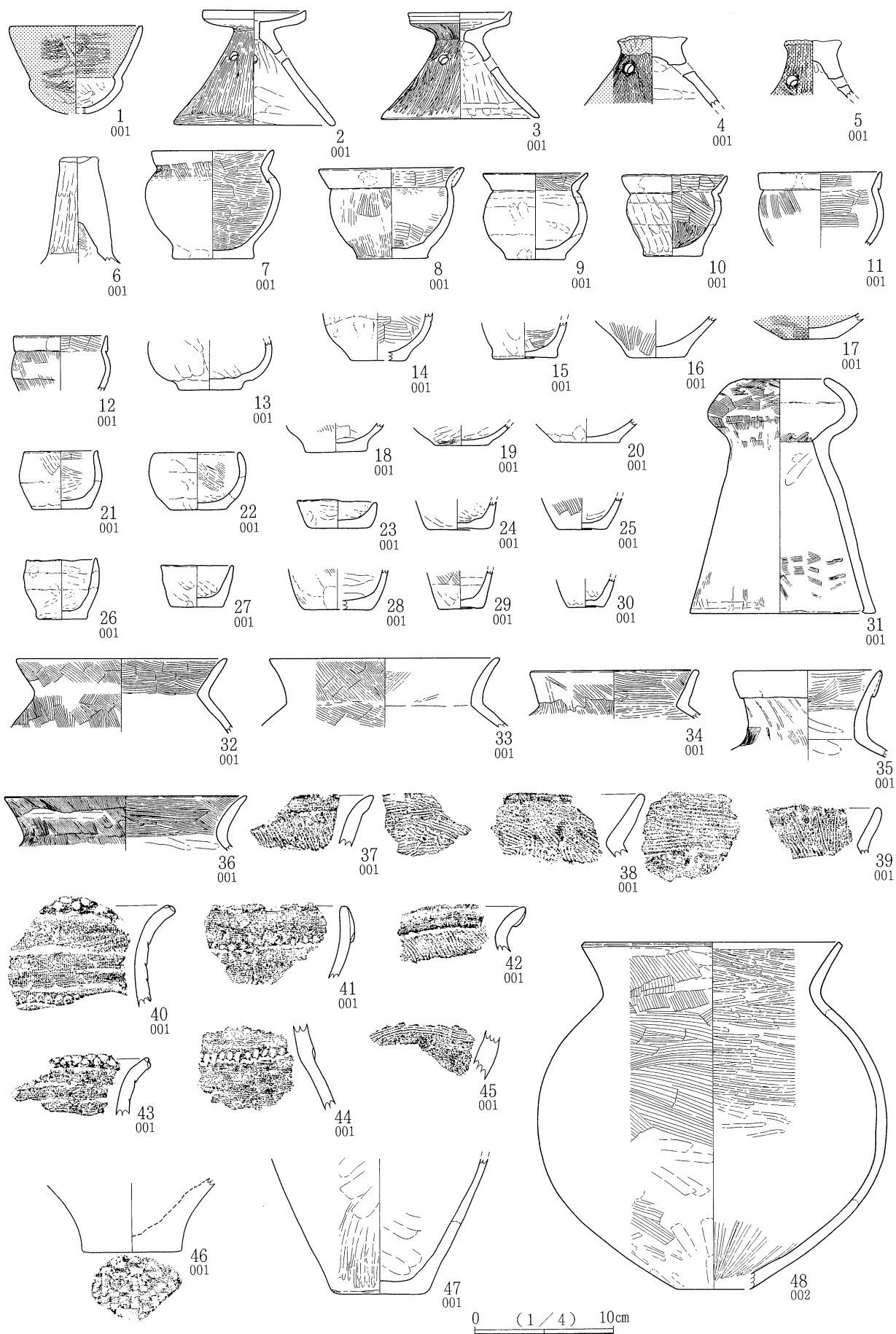
遺物の出土量は、竪穴の残存状況がよいにもかかわらずいたって少なく、土器も小片のもので占められている。007号覆土から弥生土器がまとまって出土しており、本竪穴に伴う遺物ではないかと考えられる。第8図71～86は、弥生時代後期の土器と考えられ、本竪穴の構造からも、竪穴の時期は後期が妥当であろう。

010号跡

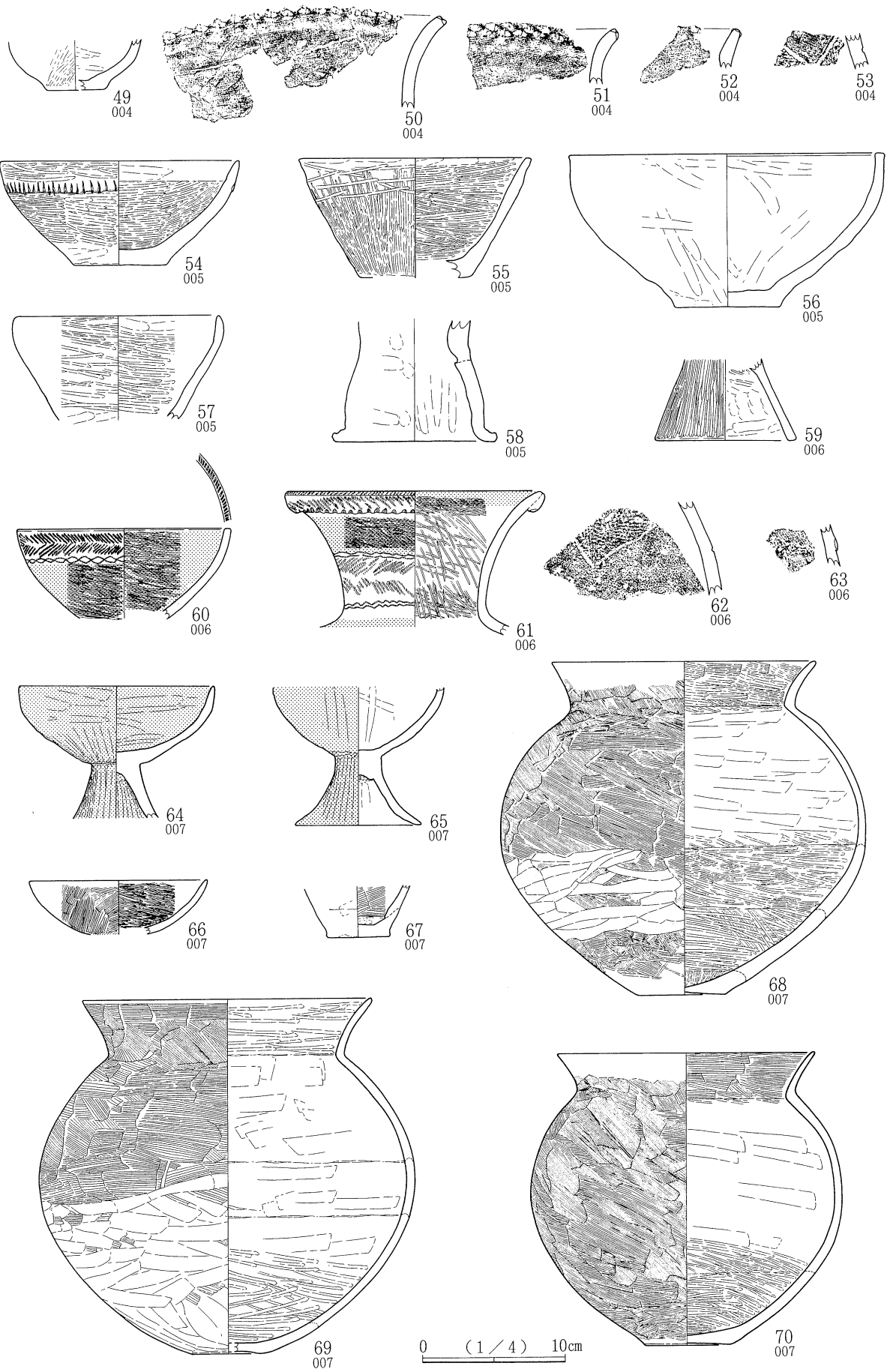
A2-05からA2-36グリッドにかけて検出された溝状遺構である。検出面から底面までの深さはあまりない。調査区内の総延長は約7.5mで、さらに北側へ延びている。底面には多数のピットが認められ、径・深さともにまちまちである。最も深いピットは底面から53cm、浅いもので14cmである。底面は不安定で、溝幅も一定ではない。出土遺物はなく、時期は不明である。

011号跡

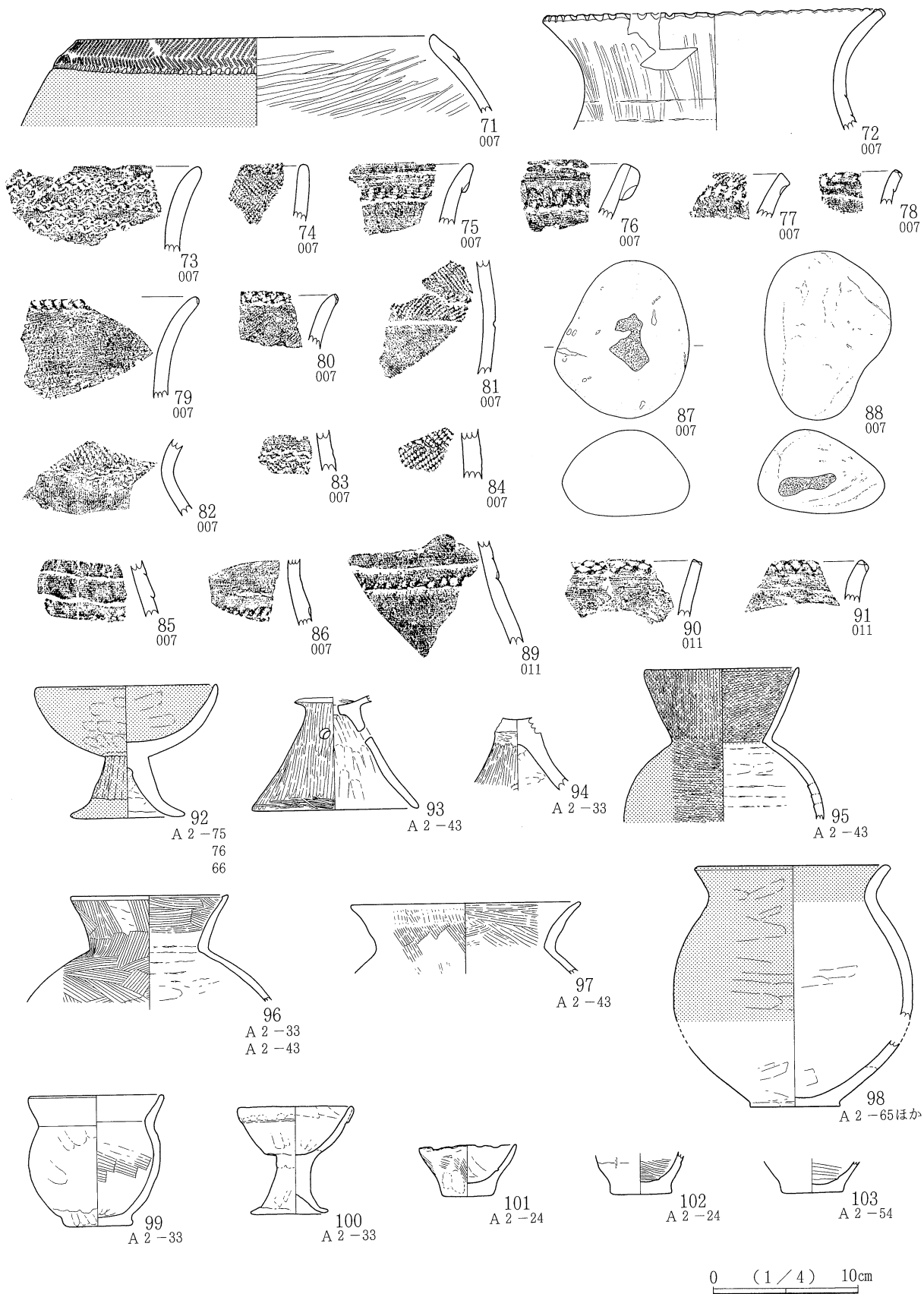
A2-28からA2-59グリッドにかけて検出された溝状遺構である。008号跡と切り合う。前述したように、008号跡の方が新しいと考えられる。調査区内の総延長は約3.9mで、さらに北側へ延びるとともに、溝中央から直角に東の方向にも延びるようである。溝幅は0.7m前後で安定している。検出面からの深さは、16cm程度で、南に行くに従い浅くなる。出土遺物は、若干の弥生土器が出土しているが、本遺構に伴う遺物ではなかろう（第8図89～91）。011号跡の覆土の状況などから中・近世の新しい時期のものと考えられる。



第6图 出土遺物 (1) (37~46 1/3)



第7図 出土遺物(2) (50~53、62・63 1/3)



第8図 出土遺物(3) (71~91 1/3)

第1表 出土土器観察表

() は推定径および残存高

出土位置	挿図番号	種別	器種	違存度	法量 (cm)	調整	色調	胎土	備考
001号	第6図1	土師器	小型丸底埴	1/4	口径 9.6 底径 ー 器高 6.4	内外面ともに横位のミガキで、外面と口縁内面に赤彩されている。	赤褐色	やや不良	覆土中
001号	第6図2	土師器	小型器台	4/4	口径 7.5 底径 11.7 器高 8.3	受部はナデ、脚部外面は縦のミガキ、脚部内面は横位のナデ。受部穿孔、脚部の孔は3つ。	赤褐色	砂粒多く不良	覆土中
001号	第6図3	土師器	高坏	4/4	口径 7.5 底径 11.4 器高 7.7	受部はナデ、脚部外面は縦のミガキ、脚部内面は横位のナデ。受部穿孔、脚部の孔は3つ。	赤褐色	砂粒多く不良	覆土中
001号	第6図4	土師器	高坏	1/4	口径 ー 底径 ー 器高 5.2	脚部外面は縦のミガキ、脚部内面は横位のナデ。外面赤彩。	赤褐色	良好	覆土中
001号	第6図5	土師器	小型器台	1/4以下	口径 ー 底径 ー 器高 (4.0)	脚部外面は縦のミガキ、脚部内面は横位のナデ。外面赤彩。	褐色	良好	覆土中
001号	第6図6	土師器	高坏	1/4以下	口径 ー 底径 ー 器高 (7.6)	脚部外面は縦のナデ?、脚部内面は横位のナデ。	暗褐色	砂粒多く不良	覆土中
001号	第6図7	土師器	小型鉢	3/4	口径 9.0 底径 6.0 器高 7.8	口縁部外面ナデ、頸部にのみハケメ、体部外面ナデ、内面は全てハケメ。	暗褐色	やや不良	覆土中
001号	第6図8	土師器	小型鉢	3/4	口径 10.6 底径 5.2 器高 6.5	口縁部外面ナデ、外面にハケメを施した後ナデ、内面は口縁部、底面のみハケメ。	暗褐色	やや不良	覆土中
001号	第6図9	土師器	小型鉢	3/4	口径 7.6 底径 4.4 器高 6.3	外面ナデ、内面は口縁部のみハケメ、ほかはナデ。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図10	土師器	小型鉢	4/4	口径 7.6 底径 4.3 器高 5.8	外面ナデ、内面はハケメ。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図11	土師器	小型鉢	1/4	口径 8.8 底径 ー 器高 (5.4)	口縁部外面ナデ、頸部にのみハケメ、体部外面ナデ、内面は全てハケメ。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図12	土師器	小型鉢	1/4	口径 6.8 底径 ー 器高 (4.0)	内外面ともにナデ。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図13	土師器	小型鉢	1/4	口径 ー 底径 4.6 器高 (3.6)	外面ナデ、内面はハケメ。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図14	土師器	小型鉢	1/4	口径 ー 底径 4.2 器高 (3.4)	外面ナデ、内面はハケメ。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図15	土師器	小型鉢	1/4	口径 ー 底径 4.8 器高 (2.6)	外面ハケメ、内面ナデと黒色処理。	暗褐色	不良	覆土中
001号	第6図16	土師器	小型鉢?	1/4以下	口径 ー 底径 4.2 器高 (2.9)	外面ハケメ、内面ミガキ、内外面赤彩。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図17	土師器	小型鉢?	1/4以下	口径 ー 底径 3.8 器高 (1.8)	外面ハケメ、内面ナデ。	暗赤褐色	良好	覆土中
001号	第6図18	土師器	小型鉢	1/4以下	口径 ー 底径 4.4 器高 (2.0)	内外面ナデ。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図19	土師器	小型鉢	1/4	口径 ー 底径 3.8 器高 (1.3)	内外面ナデ。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図20	土師器	小型鉢	1/4以下	口径 ー 底径 4.8 器高 (1.7)	外面ナデ、内面ハケメ。	暗褐色	やや不良	覆土中
001号	第6図21	土師器	手捏土器	2/4	口径 5.4 底径 4.2 器高 4.2	外面ナデ、内面ハケメ。	暗褐色	やや不良	覆土中
001号	第6図22	土師器	手捏土器	2/4	口径 6.2 底径 4.3 器高 4.2	外面ナデ、内面ハケメ。	暗褐色	やや不良	覆土中
001号	第6図23	土師器	手捏土器	4/4	口径 5.8 底径 4.4 器高 2.1	内外面ナデ。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図24	土師器	手捏土器	1/4	口径 ー 底径 4.5 器高 (2.1)	外面ナデ、内面ヘラナデ。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図25	土師器	手捏土器	2/4	口径 ー 底径 3.4 器高 (2.3)	外面ハケメ、内面ナデ。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図26	土師器	手捏土器	4/4	口径 5.0 底径 3.6 器高 4.4	内外面ナデ。	暗褐色	やや不良	覆土中

第2表 出土土器観察表

()は推定径および残存高

出土位置	挿図番号	種別	器種	遺存度	法量 (cm)	調整	色調	胎土	備考
001号	第6図27	土師器	手捏土器	4/4	口径 5.2 底径 3.8 器高 3.1	内外面ナデ。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図28	土師器	手捏土器	1/4	口径 — 底径 4.8 器高 (3.9)	内外面ナデ。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図29	土師器	手捏土器	2/4	口径 — 底径 3.2 器高 (2.7)	外面ハケメ、内面ナデ。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図30	土師器	手捏土器	2/4	口径 — 底径 2.6 器高 (2.1)	内外面ナデ。	淡褐色	良好	覆土中
001号	第6図31	土師器	炉器台	4/4	口径 6.2 底径 13.4 器高 17.0	頭部から頸部はハケメ、脚部は縦のナデ、内面はハケメと間隔のあいたヘラミガキ。	赤褐色	砂粒多く不良	覆土中
001号	第6図32	土師器	甕	1/4以下	口径 15.2 底径 — 器高 (5.0)	外面ハケメ、口縁部内面ハケメ、胴部内面ナデ。	淡褐色	不良	覆土中
001号	第6図33	土師器	甕	1/4以下	口径 16.8 底径 — 器高 (5.0)	外面ハケメ、口縁部内面ハケメ、胴部内面ナデ。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図34	土師器	甕	1/4以下	口径 12.2 底径 — 器高 (3.2)	内外面ハケメ。	褐色	良好	覆土中
001号	第6図35	土師器	短頸壺	1/4以下	口径 10.8 底径 — 器高 (5.9)	口縁部外面ナデ、以下ハケメ、口縁部内面ハケメ、胴部内面ナデ。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図36	土師器	甕	1/4以下	口径 17.6 底径 — 器高 (3.9)	外面ハケメ、口縁部内面ハケメ、胴部内面ナデ。	淡褐色	やや不良	覆土中
001号	第6図37	土師器	甕?	1/4以下	口径 — 底径 — 器高 —	内外面ハケメ。	褐色	良好	覆土中
001号	第6図38	土師器	甕	1/4以下	口径 — 底径 — 器高 —	外面ハケメ、口縁部内面ハケメ、胴部内面ナデ。	褐色	不良	覆土中
001号	第6図39	土師器	甕	1/4以下	口径 — 底径 — 器高 —	外面ハケメ、内面ナデ。	暗褐色	良好	覆土中
001号	第6図40	弥生土器	甕	1/4以下	口径 — 底径 — 器高 —	口端に内外面からのキザミ、輪積痕を残す、肩に円形刺突文。	赤褐色	良好	覆土中 004号跡の遺物か
001号	第6図41	弥生土器	鉢	1/4以下	口径 — 底径 — 器高 —	内外面ナデ、段の部分に縄文原体による連続したキザミ。	暗褐色	不良	覆土中 004号跡の遺物か
001号	第6図42	土師器	甕	1/4以下	口径 — 底径 — 器高 —	口縁部外面ナデ、以下ハケメ、口縁部内面ハケメ。	暗褐色	良好	覆土中 004号跡の遺物か
001号	第6図43	弥生土器	甕	1/4以下	口径 — 底径 — 器高 —	口端に内外面からのキザミ、輪積痕を残す。	暗褐色	良好	覆土中 004号跡の遺物か
001号	第6図44	弥生土器	甕	1/4以下	口径 — 底径 — 器高 —	肩の部分に縄文原体?による連続したキザミ。	赤褐色	良好	覆土中 004号跡の遺物か
001号	第6図45	弥生土器	鉢?	1/4以下	口径 — 底径 — 器高 —	横位の櫛描文?。	赤褐色	良好	覆土中 004号跡の遺物か
001号	第6図46	弥生土器	壺?	1/4	口径 — 底径 5.2 器高 (3.7)	内面剥落、外面ナデ、底部に網代痕。須和田式土器の可能性ある。	淡褐色	良好	覆土中
001号	第6図47	弥生土器	壺?	1/4	口径 — 底径 6.6 器高 (9.8)	外面ヘラミガキ、底面外周が擦れている。須和田式土器の可能性ある。	黄褐色	良好	覆土中
002号	第6図48	土師器	甕	2/4	口径 19.0 底径 — 器高 (25.0)	口端のみヨコナデ、外面ハケメ、胴部下半はヘラケズリ、内面ミガキ。	暗褐色	良好	覆土中
004号	第7図49	弥生土器	小型甕?	1/4以下	口径 — 底径 4.2 器高 (3.5)	内外面ナデ。	暗褐色	良好	覆土中
004号	第7図50	弥生土器	甕	1/4以下	口径 — 底径 — 器高 —	口端内外面からのキザミ、内外面丁寧なミガキ。	暗褐色	良好	覆土中
004号	第7図51	弥生土器	甕	1/4以下	口径 — 底径 — 器高 —	口端内外面からのキザミ、内外面丁寧なミガキ。	赤褐色	良好	覆土中
004号	第7図52	弥生土器	甕	1/4以下	口径 — 底径 — 器高 —	口端内外面からのキザミ。	暗褐色	やや不良	覆土中

第3表 出土土器観察表

()は推定径および残存高

出土位置	挿図番号	種別	器種	違存度	法量 (cm)	調整	色調	胎土	備考
004号	第7図53	弥生土器	壺?	1/4以下	口径— 底径— 器高—	縄文施文後沈線による区画。	赤褐色	良好	覆土中
005号	第7図54	弥生土器	鉢	4/4	口径16.8 底径6.6 器高7.4	内面ナデ、段にヘラによる連続したキザミ、体部外面は横位のヘラミガキ。	淡褐色	良好	覆土中
005号	第7図55	弥生土器	鉢	1/4以下	口径16.4 底径7.8 器高8.5	内外面ヘラミガキ、底部近くで若干のヘラケズリ。全体に調整が粗い。	淡褐色	良好	覆土中
005号	第7図56	弥生土器	鉢	1/4	口径22.8 底径7.4 器高10.8	内外面ナデ。	暗褐色	やや不良	覆土中
005号	第7図57	弥生土器	鉢?	1/4	口径14.2 底径— 器高(7.4)	内外面粗いミガキ、58と同一個体の可能性があり、炉器台か。	淡褐色	良好	覆土中
005号	第7図58	弥生土器	炉器台?	3/4	口径— 底径11.6 器高(8.5)	内外面粗いナデ、57と同一個体の可能性があり、炉器台か。	淡褐色	良好	覆土中
006号	第7図59	弥生土器	台付甕	1/4以下	口径— 底径10.0 器高(5.8)	外面ミガキ、内面ナデ。	暗褐色	良好	覆土中
006号	第7図60	弥生土器	鉢	1/4	口径15.2 底径— 器高(6.4)	口縁部外面にLR・RLの羽状縄文、下端に2段の結節縄文、内外面ミガキ、内外面赤彩。	赤褐色	良好	覆土中
006号	第7図61	弥生土器	壺	1/4以下	口径18.3 底径— 器高(9.5)	口縁部にL・Rの羽状縄文、頸部にもL・Rの羽状縄文と2段の結節縄文、口縁内面と外面に赤彩。	赤褐色	良好	覆土中
006号	第7図62	弥生土器	壺	1/4以下	口径— 底径— 器高—	縄文施文後沈線による区画。	淡褐色	不良	覆土中
006号	第7図63	弥生土器	甕	1/4以下	口径— 底径— 器高—	肩の部分に縄文原体による連続刺突文。	暗褐色	良好	覆土中
007号	第7図64	土師器	高坏	2/4	口径— 底径— 器高(9.3)	内面ナデ、坏部外面と脚部外面はヘラケズリ、脚部内面ナデ。全面赤彩。	赤褐色	良好	覆土中 古墳時代 後期前葉
007号	第7図65	土師器	高坏	1/4	口径— 底径8.9 器高(9.7)	内面ナデ、坏部外面と脚部外面はヘラケズリ、脚部内面ナデ。全面赤彩。	赤褐色	良好	覆土中 古墳時代 後期前葉
007号	第7図66	土師器	高坏?	1/4	口径12.6 底径— 器高(3.8)	内面は丁寧なミガキ、外面はハケメ。	赤褐色	良好	覆土中
007号	第7図67	土師器	小型鉢?	2/4	口径— 底径4.6 器高(3.5)	外面ナデ、内面ハケメ。	暗褐色	良好	覆土中
007号	第7図68	土師器	甕	4/4	口径18.7 底径6.2 器高23.5	口縁外面ヨコナデ、外面ハケメ、胴部下半はミガキ、口縁内面ハケメ、内面ミガキ。	暗褐色	不良	覆土中
007号	第7図69	土師器	甕	4/4	口径20.2 底径5.0 器高25.0	外面ハケメ、胴部下半はミガキに近いヘラケズリ、内面ミガキ。	暗褐色	不良	覆土中
007号	第7図70	土師器	甕	4/4	口径18.2 底径6.0 器高20.6	口縁外面ヨコナデ、外面ハケメ、胴口縁内面ハケメ、内面ナデとミガキ。	暗褐色	不良	覆土中
007号	第8図71	弥生土器	鉢	1/4以下	口径— 底径— 器高—	口縁部外面にLR・RLの羽状縄文、段に縄文原体による連続したキザミ、内外面ミガキ、外面赤彩か。	褐色	良好	覆土中 009号跡 の遺物か
007号	第8図72	弥生土器	甕	1/4以下	口径— 底径— 器高—	口端に連続したキザミ、外面粗いミガキ、内面ナデ。	淡褐色	やや不良	覆土中 009号跡 の遺物か
007号	第8図73	弥生土器	甕	1/4以下	口径— 底径— 器高—	2段一組の結節縄文を多段に施文している。内面ミガキ。	赤褐色	良好	覆土中 009号跡 の遺物か
007号	第8図74	弥生土器	鉢	1/4以下	口径— 底径— 器高—	口端にLR、外面にLRとRLの羽状縄文。	赤褐色	良好	覆土中 009号跡 の遺物か
007号	第8図75	弥生土器	壺	1/4以下	口径— 底径— 器高—	縄文原体による連続したキザミ。	淡褐色	良好	覆土中 009号跡 の遺物か
007号	第8図76	弥生土器	壺	1/4以下	口径— 底径— 器高—	縄文原体による連続したキザミ、内外面赤彩。	赤褐色	良好	覆土中 009号跡 の遺物か
007号	第8図77	弥生土器	甕	1/4以下	口径— 底径— 器高—	口端にLR縄文、下端に縄文原体による連続したキザミ。	赤褐色	良好	覆土中 009号跡 の遺物か
007号	第8図78	弥生土器	甕	1/4以下	口径— 底径— 器高—	口端に連続したキザミ、輪積痕を残す。	淡褐色	良好	覆土中 009号跡 の遺物か

第4表 出土土器観察表

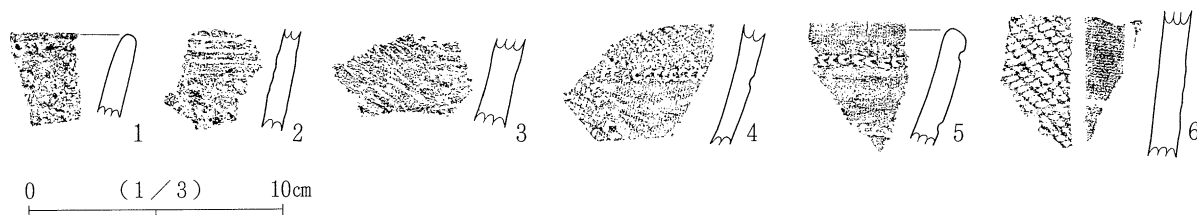
() は推定径および残存高

出土位置	挿図番号	種別	器種	違存度	法量 (cm)	調整	色調	胎土	備考
007号	第8図79	弥生土器	甕	1/4以下	口径— 底径— 器高—	口端に連続したキザミ、内外面ナデ。	暗褐色	良好	覆土中 009号跡 の遺物か
007号	第8図80	弥生土器	甕	1/4以下	口径— 底径— 器高—	口端の内外面に連続したキザミ、内外面ナデ。	暗褐色	良好	覆土中 009号跡 の遺物か
007号	第8図81	弥生土器	鉢?	1/4以下	口径— 底径— 器高—	LRとRLの羽状縄文を施文し、上下を沈線で区画、内面赤彩。	淡褐色	良好	覆土中 009号跡 の遺物か
007号	第8図82	弥生土器	壺	1/4以下	口径— 底径— 器高—	Rの縄文と2段の結節縄文を施文している。内面ナデ。	淡褐色	良好	覆土中 009号跡 の遺物か
007号	第8図83	弥生土器	壺	1/4以下	口径— 底径— 器高—	Rの縄文と2段の結節縄文を施文している。内面ナデ。外面赤彩。	褐色	良好	覆土中 009号跡 の遺物か
007号	第8図84	弥生土器	壺	1/4以下	口径— 底径— 器高—	LRとRLの羽状縄文を施文。	赤褐色	やや不良	覆土中 009号跡 の遺物か
007号	第8図85	弥生土器	甕	1/4以下	口径— 底径— 器高—	輪積痕を残している。	淡褐色	良好	覆土中 009号跡 の遺物か
007号	第8図86	弥生土器	甕	1/4以下	口径— 底径— 器高—	肩の部分に縄文原体による連続したキザミ。	暗褐色	良好	覆土中 009号跡 の遺物か
011号	第8図89	弥生土器	甕	1/4以下	口径— 底径— 器高—	輪積痕を残し、肩の部分に縄文原体による連続したキザミを施している。	暗褐色	良好	覆土中
011号	第8図90	弥生土器	甕	1/4以下	口径— 底径— 器高—	口端に内外面からのキザミ。	褐色	良好	覆土中
011号	第8図91	弥生土器	甕	1/4以下	口径— 底径— 器高—	口端に内外面からのキザミ。	淡褐色	良好	覆土中
A 2-66 A 2-75 ほか	第8図92	土師器	高坏	3/4	口径12.6 底径8.0 器高9.2	内面ナデ、坏部外面と脚部外面はヘラケズリ、脚部内面ナデ。全面赤彩。64・65に類似。	赤褐色	良好	包含層 古墳時代 後期前葉
A 2-43	第8図93	土師器	小型器台	2/4	口径— 底径11.6 器高(7.9)	脚部外面は縦のミガキ、脚部内面は横位のナデ。受部穿孔、脚部の孔は3つ。	赤褐色	良好	包含層 古墳時代 前期
A 2-33	第8図94	土師器	高坏	1/4	口径— 底径— 器高(5.0)	脚部外面は縦のミガキ、脚部内面はナデ。	赤褐色	良好	包含層 古墳時代 前期
A 2-43	第8図95	土師器	埴	2/4	口径10.8 底径— 器高10.6	口縁内外面ミガキ、体部ミガキ、内面ナデ、内面を除き全面赤彩。	赤褐色	良好	包含層 古墳時代 前期
A 2-33 A 2-43	第8図96	土師器	甕	1/4	口径11.0 底径— 器高(7.5)	内面ナデ、口縁部内外面、体部外面ハケメ。	暗褐色	良好	包含層 古墳時代 前期
A 2-43	第8図97	土師器	甕	1/4以下	口径16.0 底径— 器高(5.0)	内面ナデ、口縁部内外面、体部外面ハケメ。	暗褐色	良好	包含層 古墳時代 前期
A 2-65 A 2-66 ほか	第8図98	土師器	甕	3/4	口径13.7 底径6.3 器高(16.7)	口縁ヨコナデ、内外面ともにナデ、胎土が64・65・92と類似。内面を除きほぼ全面赤彩。	赤褐色	良好	包含層 古墳時代 後期前葉
A 2-33	第8図99	土師器	小型鉢	3/4	口径9.5 底径4.6 器高9.1	口縁部ヨコナデ、内外面ナデ。	暗褐色	やや不良	包含層 古墳時代 前期
A 2-33	第8図100	土師器	ミニチュア	3/4	口径8.1 底径5.4 器高7.5	全面ナデ。底面に若干のハケメ。	暗褐色	不良	包含層 古墳時代 前期
A 2-24	第8図101	土師器	ミニチュア	1/4	口径6.8 底径3.4 器高3.5	外面ハケメ、内面ナデ。	暗褐色	良好	包含層 古墳時代 前期
A 2-24	第8図102	土師器	ミニチュア	1/4	口径— 底径4.2 器高(2.9)	外面ナデ、内面ハケメ。	褐色	良好	包含層 古墳時代 前期
A 2-54	第8図103	土師器	ミニチュア	1/4	口径— 底径4.2 器高(2.1)	外面ナデ、内面ハケメ。	褐色	良好	包含層 古墳時代 前期

第3節 遺構外出土縄文土器（第9図）

発掘調査によって出土した縄文土器は、わずか10点である。縄文土器を伴う遺構は、今回は検出されておらず、縄文土器をある程度包含する層も見いだされなかったことから、周辺における縄文時代の活動は希薄なものであったと考えられる。早期は田戸上層式、条痕文系土器、前期は諸磯a式、中期は加曾利EⅡ式の各型式が出土している。10点のうち6点を図示した。

1は繊維を多量に混入するが、胎土は硬く焼き締まっている。口端が若干面取りされている。緩く外反する深鉢であろう。器面の調整はナデである。田戸上層式であろう。2は表裏に条痕が施されている。繊維を多く混入している。3は外面にのみ条痕が認められ、内面はほとんど調整されていない。繊維を混入する。4は半截竹管による押引文によって区画した中にRL縄文を充填している。胎土に砂粒を多く混入する。焼成が良く、硬く焼き締まっている。諸磯a式であろう。5は口縁部である。半截竹管により横位の押引文が施される。胎土に砂粒を多く混入する。焼成が良く、硬く焼き締まっている。内面の調整は丁寧である。諸磯a式であろう。6は垂下する無文帯をもち、RLR縄文が施文されている。加曾利EⅡ式であろう。この他に図示しなかった土器は、諸磯a式と思われるもの2点、赤彩された加曾利EⅡ式と思われる小片1点、時期不明1点である。

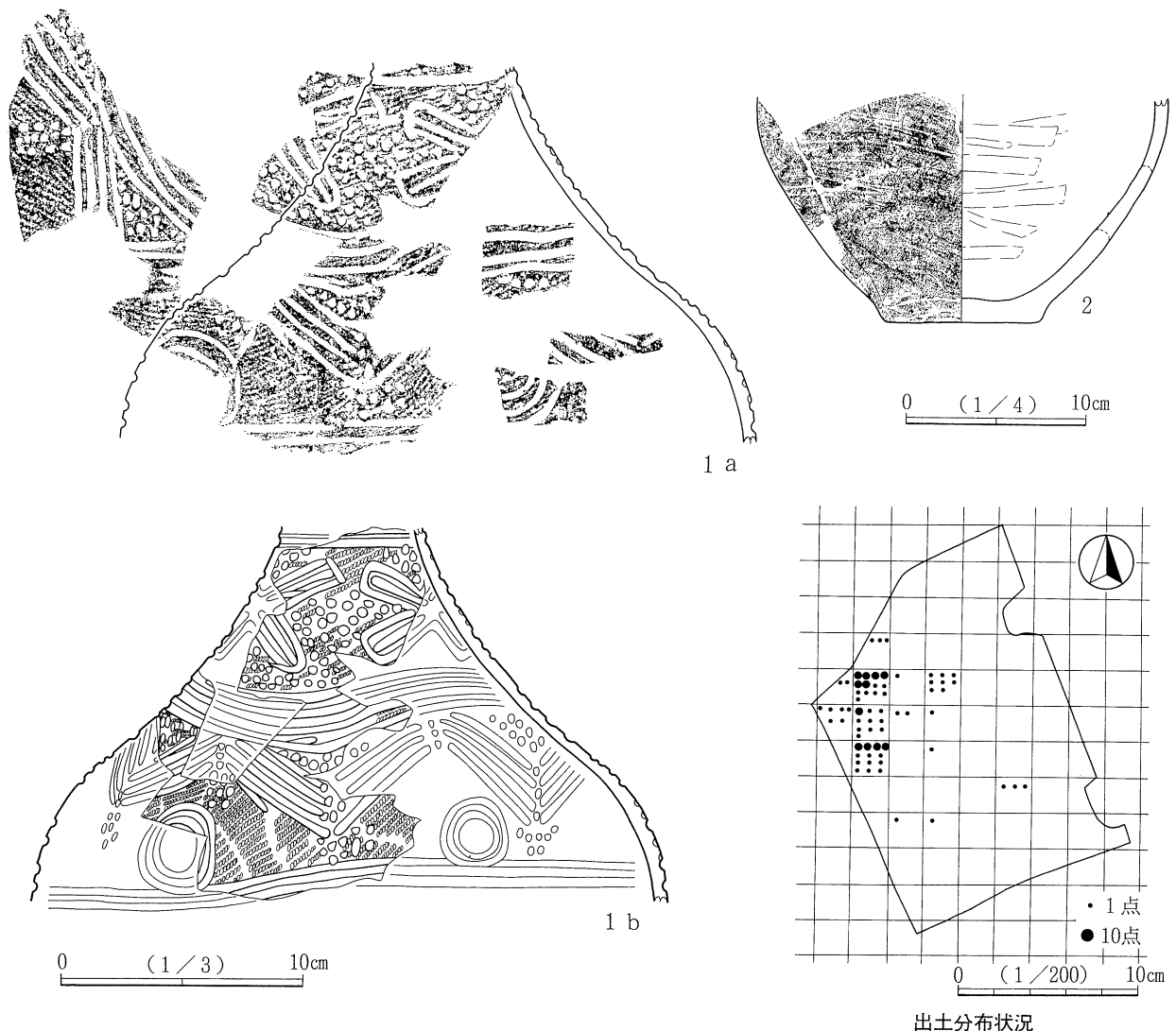


第9図 遺構外出土縄文土器

第4節 遺構外出土弥生土器（第10～12図）

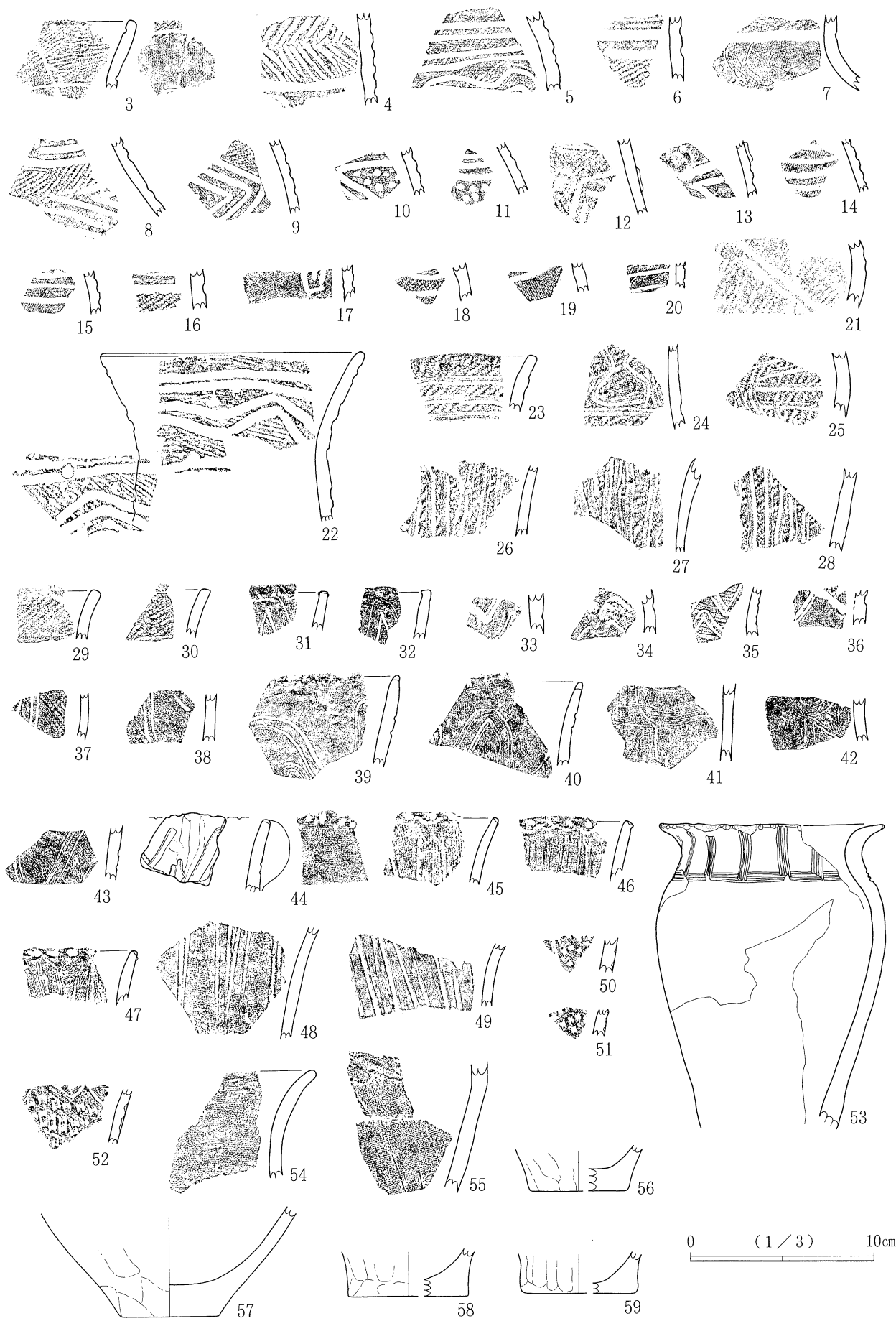
出土位置 厚く堆積した漸移層（Ⅱ層）中や各遺構の覆土内から弥生時代中期前半の須和田式土器が出土している。当該期の遺構は検出できなかったが、土器は比較的豊富な内容を含んでいた。土器片の総出土点数は524点である。第10図に出土分布図を示した。調査区西側のA2-34グリッドを主体に分布している。分布図には遺構覆土内から出土した土器片数を示していないが、001号跡の周溝からは98点も出土しており遺構出土例も含めると西側のみに集中しているわけではなさそうである。須和田式期以降の遺構覆土内に当該土器が含まれていることから、厚く堆積した漸移層（Ⅱ層）中に須和田式土器の包含層が存在するのではないかとと思われるが、調査中には確認することができなかった。

器種 須和田式土器の器種には一般的に壺、甕、鉢ないし深鉢などが見られるが、今回の調査によって出土した器種は、器形を良好に残しているものが少なく大まかな分類にならざるをえないが、壺は容易に分離できるが甕・鉢は破片では峻別が難しい。壺は長頸壺で占められるようである。甕は口縁部が最大径となり、頸部が若干くびれて胴部へと至る器形のもを主体とする。底部の破片10点を除いて、土器片数による器種構成は、小片のため判断しにくいものもあるが、壺と判断されるものはおよそ66点しかなく、全体での割合は13%である。甕・鉢は残り87%を占めることになり、圧倒的に甕・鉢の割合が高い。第10～12図に実測図及び拓本図でその一部を示した。

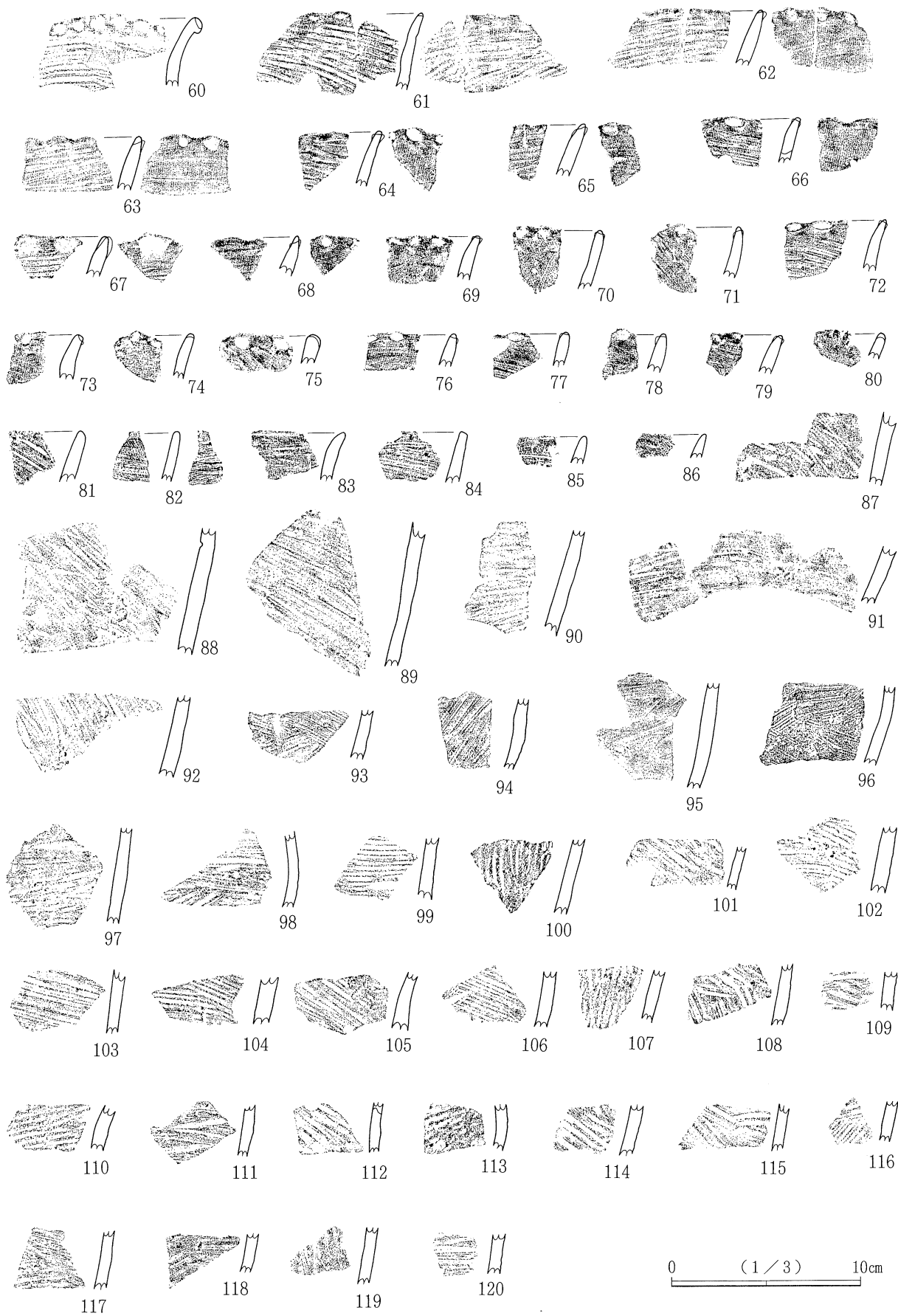


第10図 遺構外出土弥生土器 (1)

壺 1～22が壺と考えられるものである。個体数としては4～7個体程度であろう。1は、唯一器形がわかる長頸壺である。口縁が朝顔形に開き頸部が長く伸び横位の沈線によって画されたところから次第に径を増し、胴部が最大径となる器形である。肩が若干張っている。胴部下半は残念ながら欠けており文様の有無も判断しにくい。胴部中段に横位に走る沈線から下は無文であろう。文様は細かなLR単節縄文を地文とする。横位の沈線によって肩の部分の文様帯を2段に分割している。上段には花びら状の沈線文を施し、雑な刺突を加えている。下段には山形と同心円文を施し、雑な刺突を充填している。器面は荒れており、内面は器壁が全体に剥落している。2は壺の胴部下半である。器厚がやや厚い。外面の調整は丁寧なミガキであろうと思われるが、この他に擦痕のような細く雑な調整痕が伴う。底面は外周部分のみが磨り減っている。3は唯一の壺の口縁部である。口縁内面に横位の沈線が走る。外面には縄文が施されている。4は壺の頸部で、横位に羽状沈線文が施される。5はLR単節縄文を地文とし、横位と蛇行する沈線が施されている。8～13は同一個体と思われる。雲母が若干混入し器厚が薄い。重菱形文の内部に刺突を充填している。また、12・13は貼付浮文である。14～20は小型の壺であろう。21はLR縄文を地文とし、斜方向のミミズばれ状隆帯を施している。22はRの無節縄文を地文とし、ヘラ状の工具による2本の沈線によって文様を描出している。器形は太く



第11圖 遺構外出土弥生土器(2)



第12图 遺構外出土弥生土器 (3)

短い頸部の壺であろうと考えられるが、あるいは小型の鉢かもしれない。

甕・鉢 23～120がこれらの器種にあたる。基本的には縄文を地文とするもの、地文が施されないいわゆる無文のもの、条痕を伴うものの3種類に分けられる。23～30は縄文を地文とするものである。23～25は同一個体である。L R単節縄文を地文とし、半截竹管による沈線文を描出している。文様は単位性の認められない貧弱なものである。26～28は同一個体である。L R縄文を地文とし、半截竹管による縦位の条線からなる。29・30はL R縄文のみである。31～49・53は地文を伴わず、ヘラ描きの沈線文からなる。31～34は幅のあるヘラで山形文を描出している。35～38は半截竹管による山形文である。39～43は同一個体である。太めの半截竹管による山形文を雑に施している。口端にキザミを伴う。44は耳状の貼付浮文である。45～49は棒状工具による条線である。45～47はゆるやかに外反する口縁で、口端に連続した刺突を施している。50～52は刺突文であるが、山形文などと組み合わせられている。53は口径12.3cm、胴部最大径12.6cmの小型の甕で、口端に雑なキザミが施される。3本一組の細い沈線で横位の短い沈線を施した後、その両端と中央に垂下する沈線を施し「山」の字の様な文様を一単位として頸部に施している。54・55は無文の土器である。54の内面は横位のミガキである。69・70は口縁部である。口端に刺突を施している。内外面にナデによる調整痕を残している。無文の土器片の出土点数は163点あり量的には多いと言える。56～59は底部である。底面の形態が楕円形のものも出土している。径は総じて小さい。60～68・71～120は、条痕を伴うものである。器形は鉢ないし深鉢を主体としている。60のようにやや強く外反するものもあるが、ほとんどは直線に近いが若干外反するもので占められる。71のように内湾するものもあり、深鉢と言えるものも含まれているようである。口縁部には連続する刺突文が施されている。刺突文の施文方法は、60・61のように口端に棒状工具の側面をあてるもの、62～64のように棒状工具を内面からあてて外側に押し出すようにするものなどがある。このほか67のように指によって内外面から押圧を加え、内外に口縁が波状を呈するものもある。条痕は、横・縦・斜の3方向のものがあり、完形個体がないため部分による施文の違いは分からないが、全体的には斜方向のものが多く、条痕の種類は、粗い茎束条痕が多く、細密条痕は少ない。施文部位は外面に施文して内面には施文せず、ナデによる器面調整だけのものがほとんどだが、61のように内面にも施すものも若干あるが、極めて少ない。

器面調整 条痕を除いて器面調整の方法は、ナデ調整を主体としている。ミガキは限られている。内面、外面ともにナデの方法は、全体的に粗く、内面に輪積痕を残すものも見られ、縄文土器においても一般的に見られるような内面の丁寧な調整はあまり行われていない。1の長頸壺の内面は剥落が顕著で、このほかの土器でも内面が剥落しているものが目立つ。焼成の温度や、その後の使用方法にもよるのであろうが、焼成前の段階での器面調整があまりのまいではないかと思われる。

胎土・焼成・色調 胎土には細かい砂を含むものが多い。焼けた粘土粒を混入しているものもある。石英砂を多く混入するものもあるが、量的には少ない。色調は全体に黒色ないし暗色を呈するものが主体で、焼成は全体にあまい感じを受ける。赤褐色を呈する焼成が良好な個体は少ない。条痕施文の土器には、内面が褐色ないし赤褐色を呈するのに対し、外面が煤けて黒色を呈するものがあり、煮沸用の土器として使用された結果によると見られる例も多い。

文様 今回の調査によって出土した土器のうち、文様を伴うのは出土量の少なかった壺と甕の一部に限られる。壺の文様には沈線による山形文、羽状文、波状文、重菱形文などがある。12は沈線が

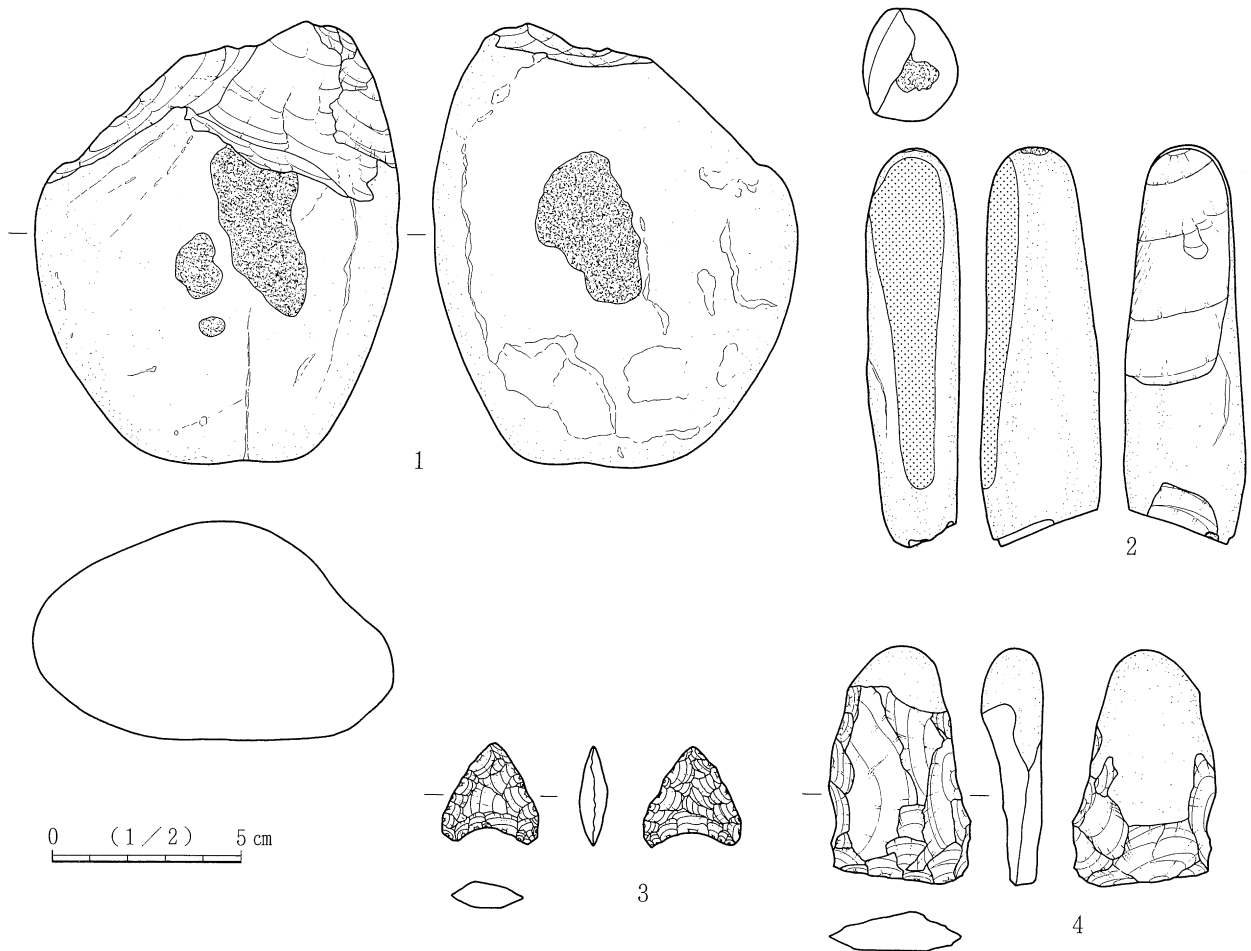
直角に交わることから重四角文の可能性がある。甕は半截竹管による山形文や条線、53のような特殊な沈線文も見られる。39～41の沈線文は山形文と言うよりも波状文と言うべきもので、文様構成を意識しているとは思われない非常に雑な施文が行われている。

第5節 遺構外出土石器 (第13図)

発掘調査によって出土した石器は、全部で6点である。敲石3点、研磨面を伴う敲石1点、石鏃1点、石鏃の未製品が1点である。このうち2点の敲石 (第8図87・88) が007号跡から出土しており、遺構に伴う可能性がある。

1は敲石である。やや大きめの円礫の表裏に敲打痕がある。石材はチャートで、重量は750.0gである。A2-36グリッド出土。2は長軸端に若干の敲打痕が認められ、側縁に研磨面を伴う。石材はフォルンフェルスで、重量は、111.5gである。001号跡の周溝覆土から出土。3は石鏃である。基部の扱りはゆるいカーブを描いている。表裏の調整は丁寧である。石材は安山岩で、重量は1.4gである。

007号跡の覆土から出土。4は偏平な円礫の一端と側縁に粗い調整加工を施している。自然面が残る側の端部には敲打の痕跡が残っており、両極打法による素材剥片の生産によるのではないかと思われる。これは千葉県においては石鏃の素材剥片を生産するために行われる場合が多く、4は石鏃未製品と考えられる。石材はチャートで、重量は15.4gである。A2-54グリッド出土。



第13図 出土石器 (3・4 2/3)

第 3 章 ま と め

今回の調査によって検出された遺構は、弥生時代後期の竪穴住居跡 4 棟、古墳時代前期前葉の竪穴住居跡 2 棟、古墳時代前期の方形周溝墓 1 基、時期不明の溝状遺構 2 条、時期不明土坑 2 基であった。調査面積が狭いにもかかわらず検出された遺構の密度は高く、西国吉遺跡には当該時期の集落が広く展開することは確実であろう。今回の調査では、北部に位置する佐是古墳群の造営時期に対応するような古墳時代中・後期の竪穴住居跡は検出されなかったものの、遺構外の出土だが古墳時代後期前葉の高坏などが出土しており、遺跡内に当該時期の竪穴住居跡が存在する可能性が高いと言える。

検出された遺構の時期は、弥生後期後半が006号・009号の 2 棟、弥生後期末葉が004号・005号の 2 棟、古墳前期前葉が001号の方形周溝墓と002号・007号の 2 棟に分けられる。009号からは確実な遺物の出土がなかったが007号から出土した弥生土器が、009号の遺物である可能性が高いことから後期後半として判断したが、006号の方が若干古いと見られる。古墳前期前葉の001号からは第 6 図 1・6・35などの古墳前期中葉と判断される土器も出土しているが、主体となるのは前期前葉の土器である。

007号には第 7 図64・65のように古墳後期前葉の高坏が含まれている。グリッドから出土した第 8 図92も同時期と判断され、007号付近に何らかの遺構が存在した可能性がある。

今回の調査では、須和田式土器が出土している。遺構は検出されなかったが、漸移層（Ⅱ層）が厚かったこともあり、524点の土器片が採取された。千葉県内の須和田式期の遺跡には、市原市武士遺跡、四街道市池花南遺跡、同市御山遺跡、佐倉市天神前遺跡、君津市常代遺跡、大多喜町船子遺跡、野田市勢至久保遺跡などのほか数遺跡が挙げられる程度で、依然遺跡数は多くない。おもに再葬墓と方形周溝墓から須和田式土器が出土している。今回の調査で出土した須和田式土器は、遺構に伴うものではない。器種構成は、壺13%、甕・鉢87%で圧倒的に甕・鉢が多かったことから再葬墓に伴うような器種構成ではなく、竪穴住居跡などの居住域に関連する器種構成であろう。甕・鉢を主体とする構成は、池花南遺跡の状況に類似している。時期的には常代遺跡第 2 期に相当するが、当該時期でも新しい様相を呈していると思われる。条痕施文の壺はなく、縄文を地文とする例に限られる。池花南遺跡で見られるカナムグラ回転圧痕を伴う例は認められなかった。第11図22の沈線文の太頸壺には、常代遺跡SZ-134の出土例などが類似する。常代遺跡例は、条痕施文である点が異なる。本遺跡からは条痕施文の土器が出土しているが、そのほとんどは鉢あるいは深鉢と呼べるような器形であった。今回の調査によって出土した須和田式土器は、ほとんどが小片だったため細かな器種構成にまでは言及できなかったが、おおまかな器種や文様構成などについては、本遺跡の特徴を提示することができたのではないと思われる。

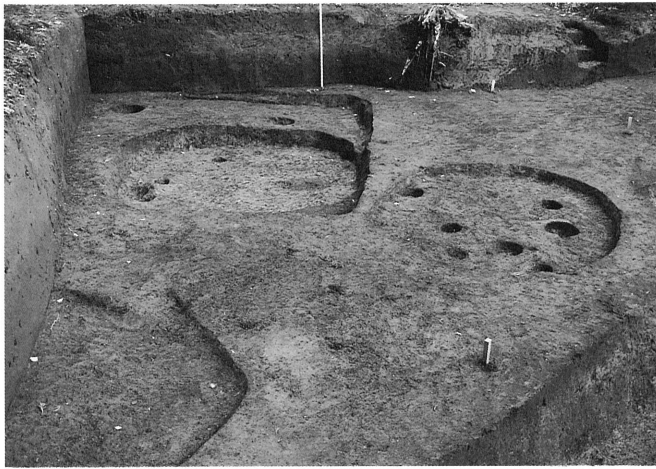
参考文献

- 青木幸一「須和田式土器における類型的把握」『日本考古学研究所集報VIII』1986
- 甲斐博幸ほか『常代遺跡群』1996 君津市文化財センター発掘調査報告書 第112集
- 加納実ほか『市原市武士遺跡1』1996 千葉県文化財センター調査報告 第289集
- 斎藤 進 「関東地方における弥生時代成立の様相」『東京都埋蔵文化財センター研究論集 1990
- 杉原荘介 『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群』1974 明治大学文学部研究報告 4
- 下津谷達男『千葉県野田市半貝・倉之橋・勢至久保』1982 野田市遺跡調査会
- 直井雅尚ほか『境窪遺跡・川西開田遺跡Ⅰ・Ⅱ』1998 松本市文化財報告No.130
- 渡辺正吾 「大多喜町船子遺跡の新事例について」『総南文化』12 1970
- 渡辺修一「関東地方における弥生時代中期前半の地域相」『千葉県文化財センター研究紀要10』1986
- 渡辺修一『四街道内黒田遺跡群』1991 千葉県文化財センター調査報告 第200集
- 渡辺修一『四街道御山遺跡(1)』1994 千葉県文化財センター調査報告 第242集

写真図版



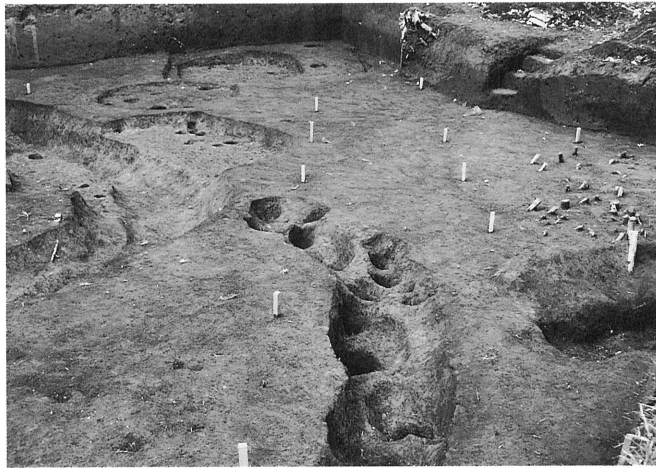
遺跡周辺の航空写真



調査区近景



調査区近景



調査区近景



001・004・011号跡



001号跡土層断面



002号跡



003号跡遺跡出土状況



003号跡



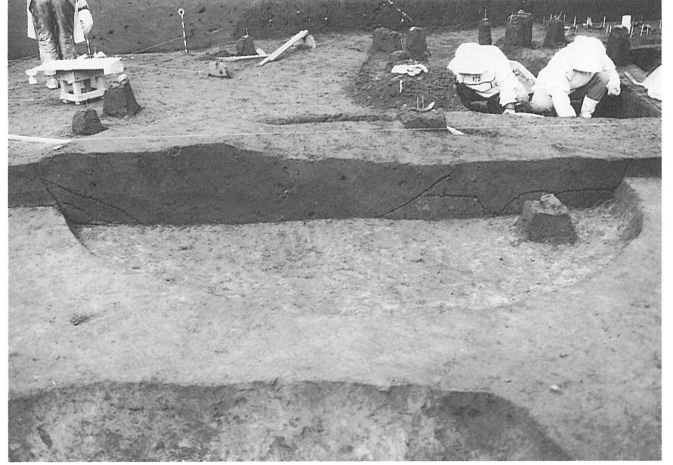
001•004号迹



005号迹



006号迹



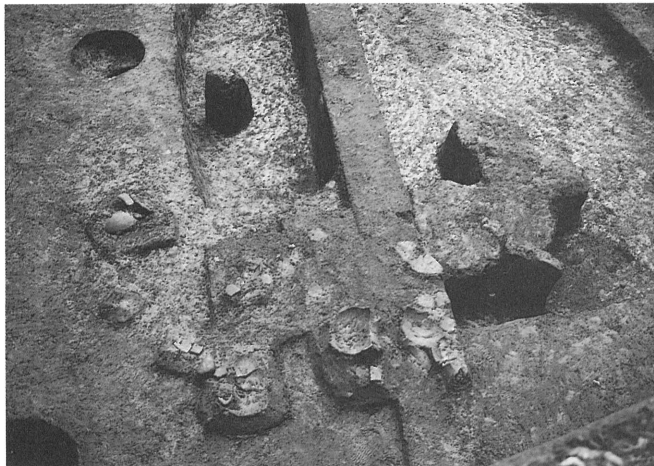
006号迹土层断面



006•007•009号迹



007号迹遺物出土状况



007号迹遺迹出土状况



008号迹

出土遺物 (1)



2
001



3
001



7
001



8
001



9
001



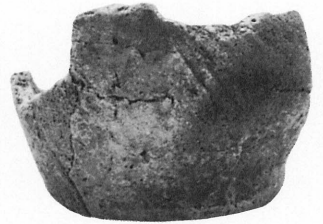
10
001



13
001



15
001



21
001



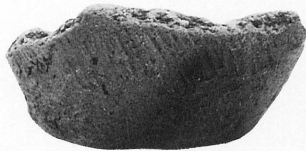
22
001



23
001



24
001



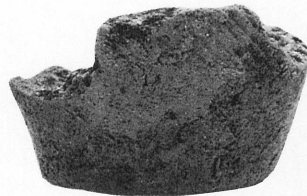
25
001



26
001



27
001



29
001



31
001



35
001



30
001



47
001

出土遺物 (2)



48
002



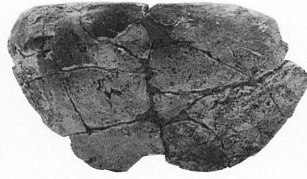
54
005



55
005



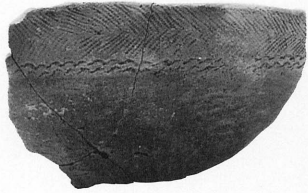
56
005



57
005



59
006



60
006



61
006



64
007



65
007



67
007



68
007



69
007



70
007



92



93

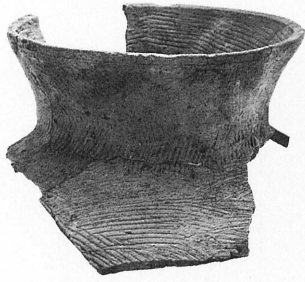


95



98

出土遺物 (3)



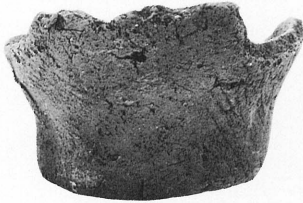
96



99



100



101



102



須和田53

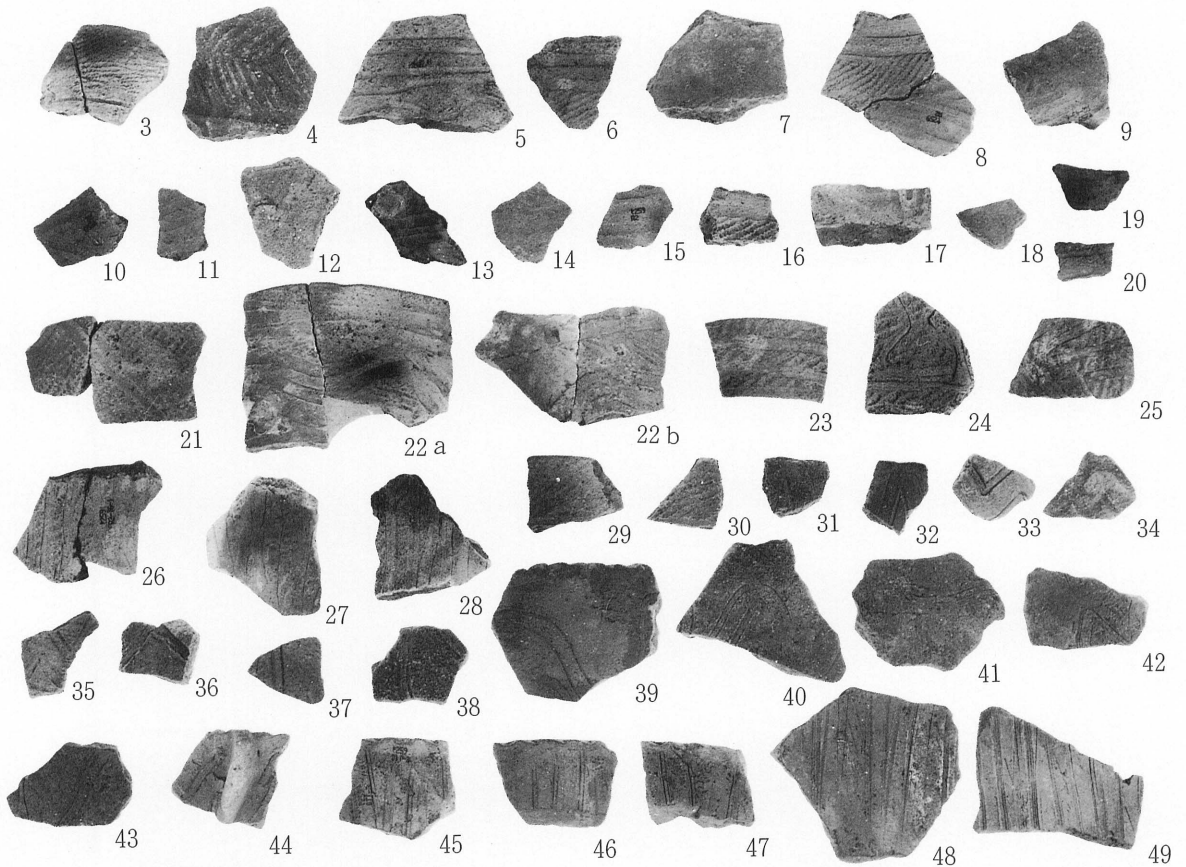


須和田1



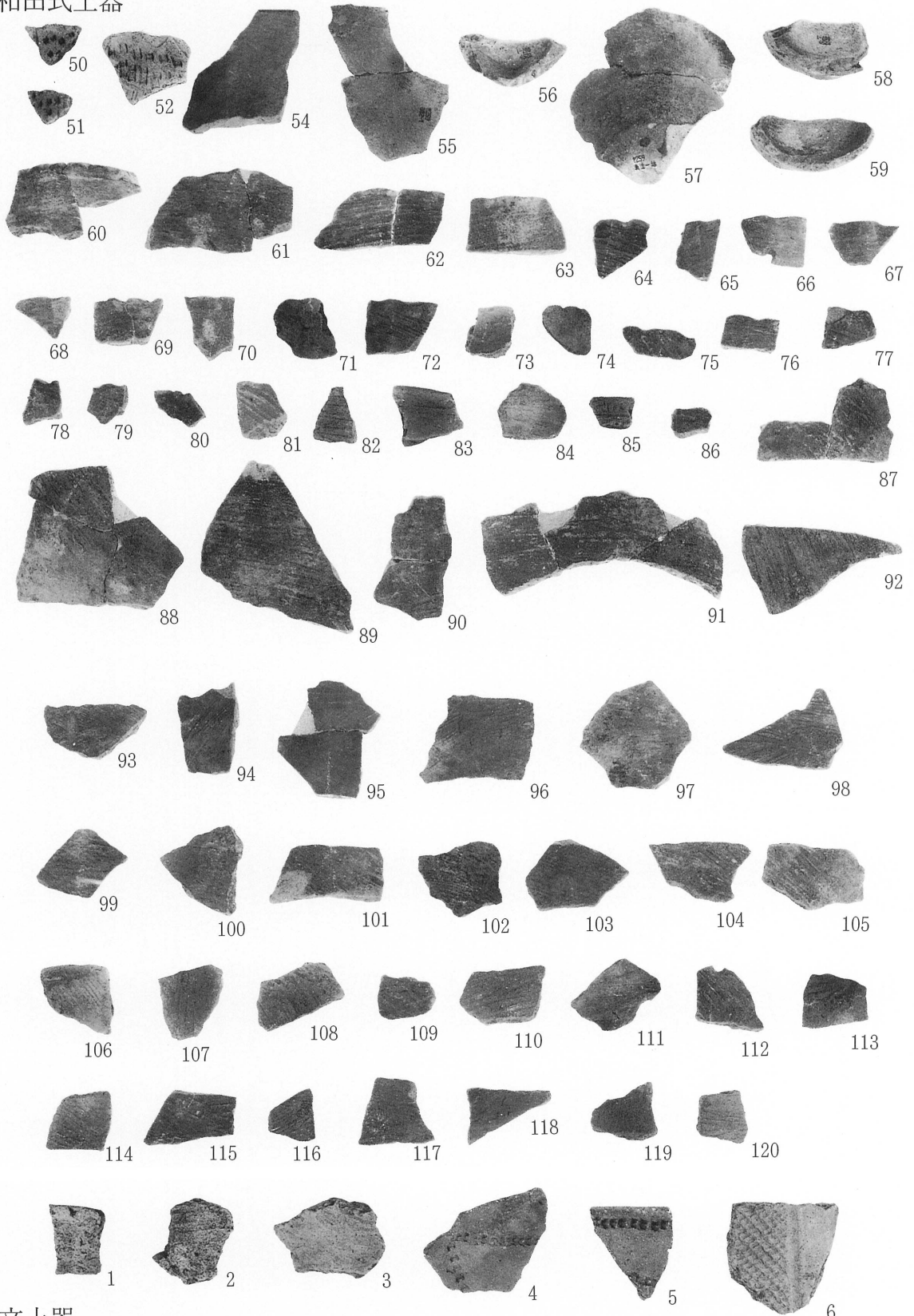
須和田2

須和田式土器



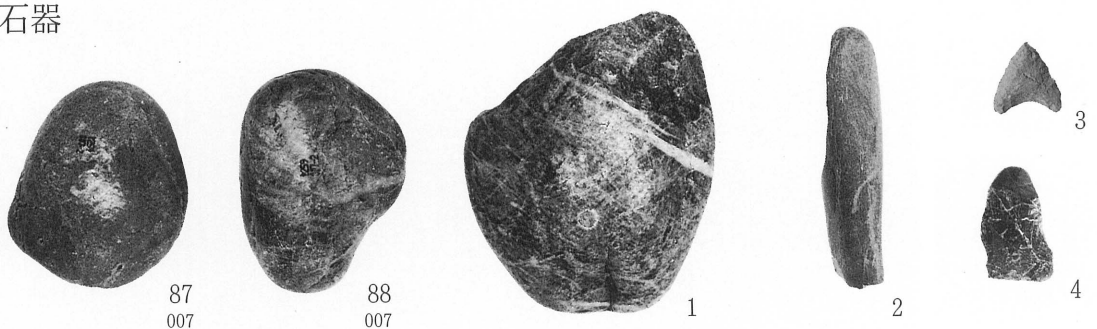
出土遺物 (4)

須和田式土器



縄文土器

出土石器



抄 録

ふりがな	いちはらしにしくによしいせき							
書名	市原市西国吉遺跡							
副書名								
巻次								
シリーズ名	財団法人市原市文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第65集							
編著者名	蜂屋孝之・小川浩一							
編集機関	財団法人市原市文化財センター							
所在地	〒290-0011 千葉県市原市能満1489番地						TEL 0436-41-7300	
発行年月日	1999年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしくによしいせき 西国吉遺跡	ちばけんいちはらしにし 千葉県市原市西 くによし 国吉293	12219	259	35度 26分 15秒	140度 07分 40秒	19971204 ～ 19971211	300	第1種電気 通信施設の 設置に伴う 埋蔵文化財 調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
西国吉遺跡	包蔵地	縄文時代		縄文土器				
	集落	弥生時代	竪穴住居跡4棟	弥生土器 甕、壺、鉢			包含層中から須和田式土器が出土。	
	古墳	古墳時代	竪穴住居跡2棟 方形周溝墓1基	土師器高杯、甕、壺、台付甕、鉢、手捏土器、炉器台			方形周溝墓の周溝内から手捏土器が多数出土。	

財団法人 市原市文化財センター調査報告書 第65集

市原市^{にしくによしいせき}西国吉遺跡

平成11年3月25日 印刷

平成11年3月31日 発行

編集 財団法人 市原市文化財センター

発行 株式会社 協和エクシオ

財団法人 市原市文化財センター

千葉県市原市能満1489番地

印刷 三陽工業株式会社

千葉県市原市五井5510-1番地